

3591

滑稽自慢演說

附 討 論 會

420
2
57



東京自由閣藏版

091673-000-5

特10-994

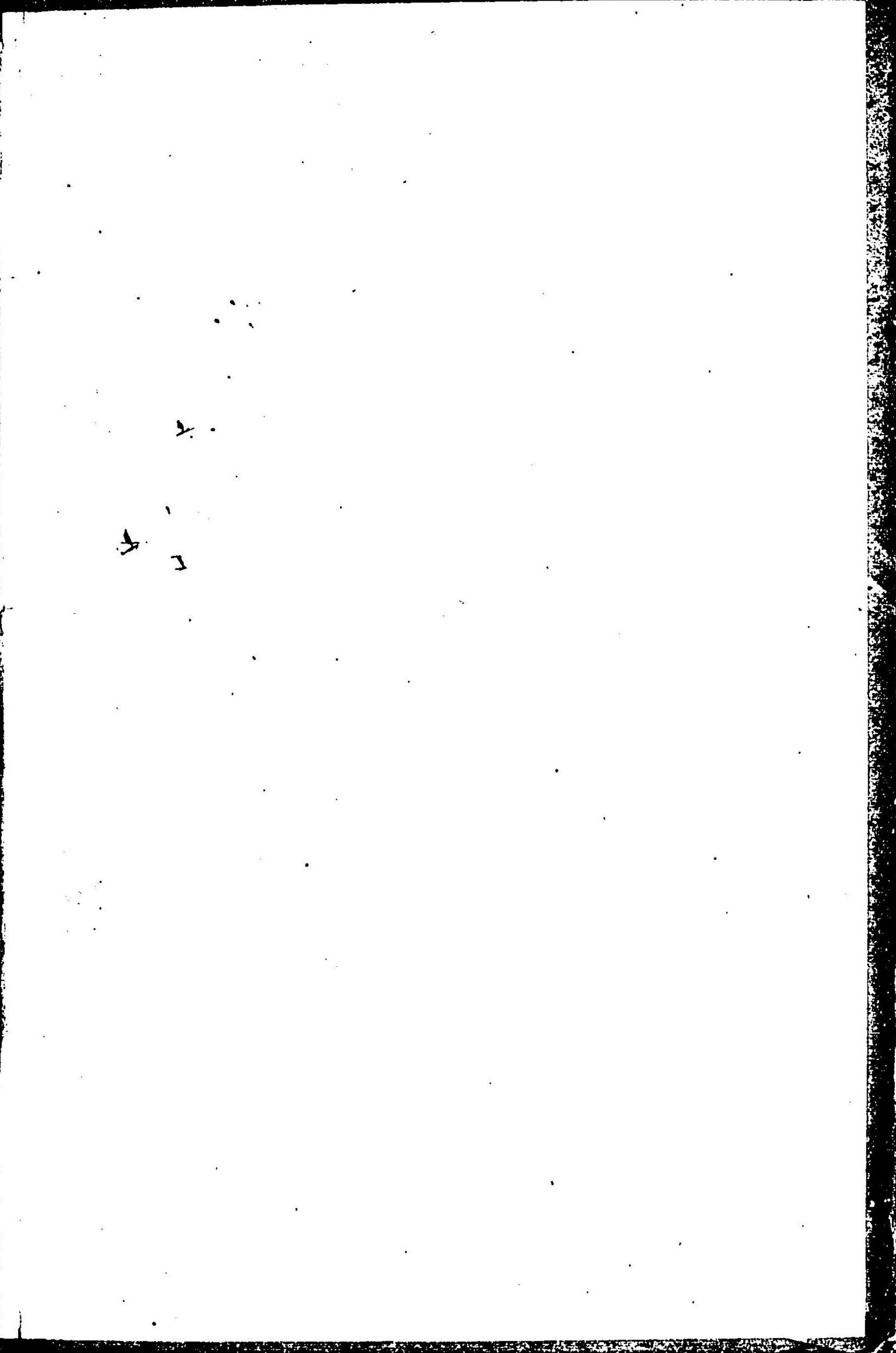
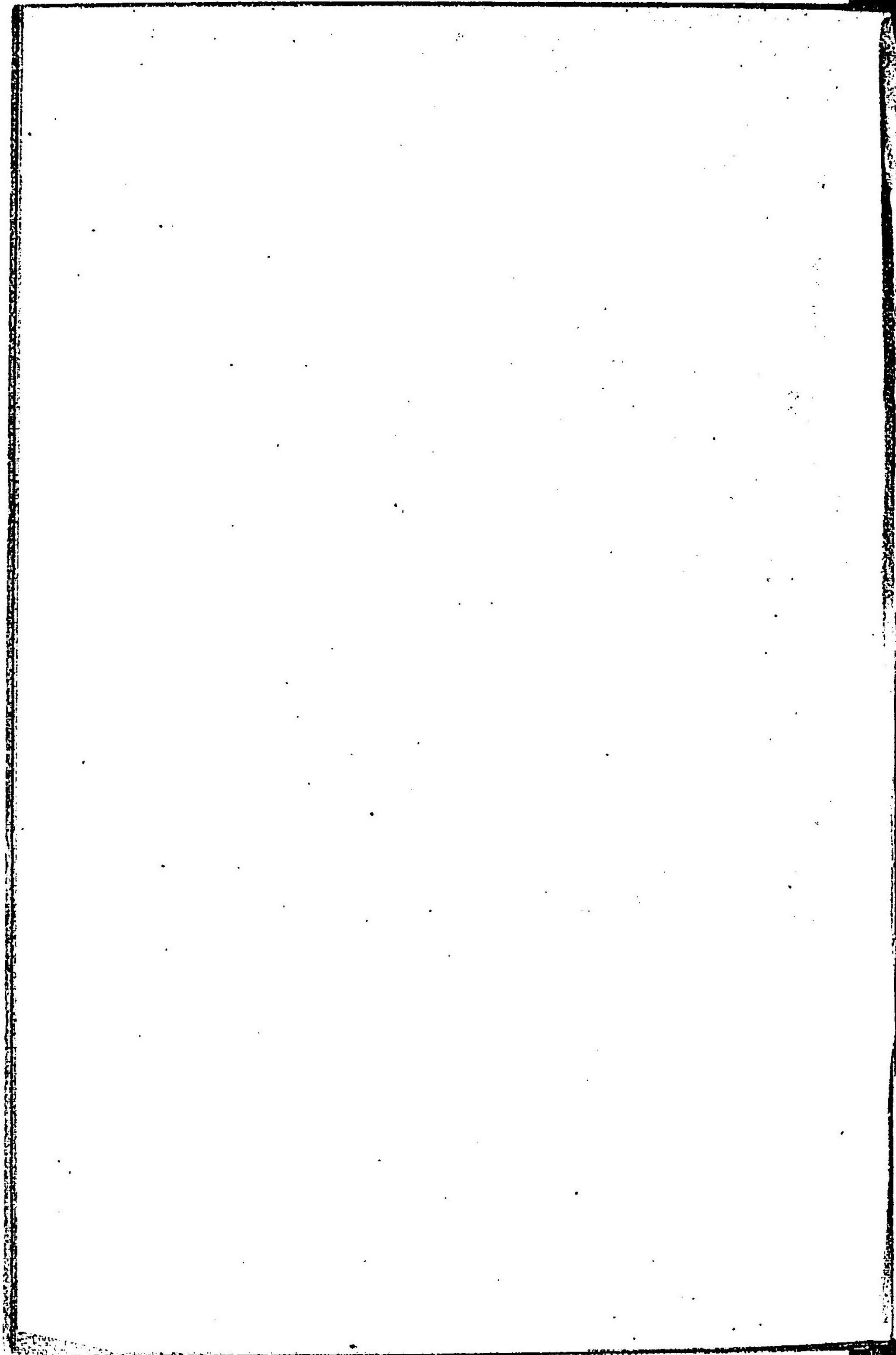
滑稽自慢演說

顯尾外/著

M22

DBO-0134





序 目 録 序 目 録
 咳 遠 方 者 傳 説 にも 聞 け 近 く 寄 り て 目 見 余 余 余
 今 滑 稽 哲 學 とい 謂 つ べ き 洒 落 の 眞 味 を 語 ら ん と 意 張 る べ
 ら ざ ら ぬ 心 の 眼 を 喜 馬 拉 山 の 絶 頂 に 打 登 して 廣 く 古 今 天 下
 滑 稽 談 社 會 を 目 渡 せ ば 蜻 蜒 漢 土 の 申 を じ し も 及 ば ず 遠 き 泰 西
 の 列 國 に 至 る 也 幼 學 の 餘 興 鬱 氣 散 ら し と して 滑 稽 の 洒 落 に 打
 撃 者 を 考 へ 死 ん ど 升 り て 量 り 箕 以 て 算 す る 程 あり と 雖 ぞ
 も 其 滑 稽 の 眞 味 を 解 す る 者 一 人 も 有 る なく 自 己 の 日 夜 事 と す る
 滑 稽 家 を も て 自 ら 任 ず る 輩 さ へ も 其 滑 稽 の 種 類 何 個 あり や 此
 數 す ら 知 ら ず 夢 生 して 夢 言 を 敲 沈 斯 くて 喰 ふ て 糞 して 寐 て 起 き
 て 偕 て 其 後 は 死 ぬ る ば かり ぞ 憫 然 なる 其 甲 斐 な き 情 態 遂 に 余



をして右の如く遠からん者は傳説よも聞け近くバ寄りて目にも見よと意張らしむるに至れる譯合なり余豈ふ自ら好みて意張らんや彼れ滔滔たる天下億兆は人彼の日堅斯一九が輩もら滑稽の眞味を知らざるもの遂ふ余をして斯くは意張らしむるものあるはみ是を彼れの爲す所にして余は自ら爲す所にあらざるなり夫れ天下の滑稽ふ三種類あり即ち第一を趣味の滑稽と云ひ第二を馬鹿毛た滑稽と云ひ第三を下品の滑稽と云ふ今夫れ之を説かんよ余を全く之を一轉して尻より説明を與へんと欲を然らば其所謂下品の滑稽とハ果して何をか云ふ曰く固と其談せんとするの本旨意敢て何等の風味もあく平々の平又凡々の凡あるものにして且つ之を談するれ句調も敢て面白味なく本元無一本のものな

るも唯だ其談する所の件下關りの事に係はるをもて何となく可笑く思ひつ微笑るゝも之を名づけて下品は滑稽とは申すあり是れ最も野卑賤劣の滑稽よして實は滑稽とは云ふべからざるものなれども今假に此の下品の滑稽は過稱を與ふるのみ其實は尿に近き談あれば此等の談話を爲す者は宜しく葛西の大哥の兄弟分糞談師どころは申すべけれ偕て其次ぎに所謂馬鹿毛た滑稽とは果して何をか云ふ曰く其談敢て下關りに渉るにあらず去りて其本旨の趣味あるにあらず固と無味淡泊にして少しも面白くも可笑くもあき事を談するふ當てや其人の輕口なる唯だ夫れ口から出任せ出放題何でも出鱈目の饒舌が何となく面白きを感じ可笑さを覺はるもの之を號して馬鹿毛た滑稽とは申すあり這

も亦彼の下品は滑稽と同一く眞の滑稽とは云これぬものかれども今假に此の馬鹿毛た滑稽の過稱を授くるのみ其實は出鱈目出放題の癡言にも類するもはあれば此等の談を爲す者は宜しく癡言の餘談師どころへ申すべけれ偕て其亞きふ所謂趣味の滑稽とは果して何をか云ふとの問ひあらずとも我れより好みて之を答へまく欲する所なり曰く其事柄は敢て下關りふ渉らざ又敢て出鱈目出放題の輕口を敲かぞ殆んど眞面目は議論にても談むるかど疑はれつるが如きも一たひ之を容るゝみ足る讀者の思想をもて其論旨を味ふまば無量の趣味言ふべからざるの風致ありて其甘きこと殆んど飴蜜に如くにして得も言はれぬ風味は何も譬へんか天下の廣きも殆んど之を喩ふるの物なり且つ其論旨の確

乎として學術社會の事項ふ應用し得ること敢て眞面目の議論に劣らず寧ろ彼れも一步優りつべきものあるに似たり是れを之れ趣味の滑稽とい稱するあり是れ即ち眞個は滑稽あり以上三種の滑稽孰も皆あ之を見之を聞く者をして笑はせるを主とせるものかれども其笑はせる所以のものよ至ては大に異ありとす即ち趣味の滑稽は莞爾として無量の笑面を買ひ又た馬鹿毛た滑稽はワッフ、く、く、と云ふが如記熊八の馬鹿笑ひを買ひ又下品の滑稽は遊蕩野郎の如き者の痴笑を買ふの大差あり實に天と淵月と鼈との違ひあり豈に亦日を同じくして語るべきものならんや故に其種類は共に滑稽と云ふの一言をもて通稱することを得べしと雖ども其價値は實に黄金と眞鍮白銀と鉛との差異ありて

存せり而して余は彼の下品の滑稽を嫌ふこと宛然蛇蝎の如く又彼の馬鹿毛た滑稽を忌むこと恰も虎列刺病の如く然り此二種の滑稽を嫌忌ふと既ふ此の如く其消極の最下點に達したきは一方に於ては趣味の滑稽を好むこと非常にして其積極の最上點に及びたり是れをもて余は苟も滑稽の筆を操り滑稽は口を開く時は常に趣味の滑稽を是れ事として之を専攻に論談せんことを心に掛けて止まず今夫を本書滑稽自慢演説をものするに於ても亦聊か否な専ら之を旨とし綴り做したるものありけり今や興人の下品の滑稽あると馬鹿毛た滑稽あるとを知りて趣味の滑稽あるを知らざるの社會に於て余獨り此趣味の滑稽あるを知るはチト嗚呼とや云はなんめれども是れぞ余が自慢の件にして本書滑稽

自慢演説の自慢演説たる所以のものありける是れ此の趣味の滑稽の風味は即ち熊掌、鰻飯、鯛、鮮、鶴、鴨、牛肉を易牙、八百善、西洋軒の割烹料理の名手が協力して鹽梅調理したるに類するものあり乞ふ讀者よ此の無上の風味をもて彼の江戸橋際は芋料理や柳原堤防の煮込み牛肉に似たる下品の滑稽や馬鹿毛た滑稽の下味と同一に味ふるあからんことを望まじけれ

明治廿二年三月

願尾外識しつ

滑稽自慢演説目録

- 自慢天狗の説
- 別嬪に隣りて火燵に温るの秘傳
- 小説と云ふて大きな事を書くを怪む
- 奇言ありて而して後に又奇言あり
- 爵位崇拜をもて英雄崇拜と誤認する勿れ
- 釋迦、耶穌一本參へる
- 妻ありて妻なき世の中の有様を寫す
- 地震雷火事親爺の四恐を防ぐの家屋なき乎
- 軍書の不都合の廉を攻撃す
- 書工の思慮の小なるに驚く
- 造化無言の教誡

- 聴衆の喝采を得る演説の妙法
- 造化自然男女本分の區別
- 支那史上の好人物を買ひかぶること勿れ
- ホンニ屁のやうな話
- 男女の關係を知る心理上の魯痴句
- 娘か嫁かを知るの推察
- 笑の説
- 馬鹿者亞米利加の近道を求む
- 億兆人民東西南北の所有地皆其境を接す
- 孟子々々お前さんソリヤ聞はしません
- 鼓女の解
- 酒乱の解
- 小粹有りて大粹無きを怪む

○世の中に筆と舌程重寶あるものなし

○角兵衛時計

○廣小路の疑ひ

○推理學に挂らざる珍談

○背に腹の替へらるゝものゝあるところ奇怪なれ

○痴人の立癡言

○英國の情態は猶ほ淺草の觀音のふとし

○天下の英雄君と吾れとれみ

○虎列刺病より尙ほ一層恐怖るべきものあり

○婦女子の鏡舌せざるは果して何れの時なる乎

○向島の琴岡園子の繁昌する所以

○天下最第一の難辨者は金なり

○西洋人數字の爭論

○右様と左様どい果して同一なるにや

○新聞紙社説欄の疑ひ

○人の年齢に就て一種の變狀

○蘇秦張儀は眞の辨士にあらず

○國會議員は果して世人の思惟するが如き高尙の人物なる乎

○閻魔の顔も三度

○洒落哲學の原理

○天下最第一の勉強家

○白馬の馬にあらず

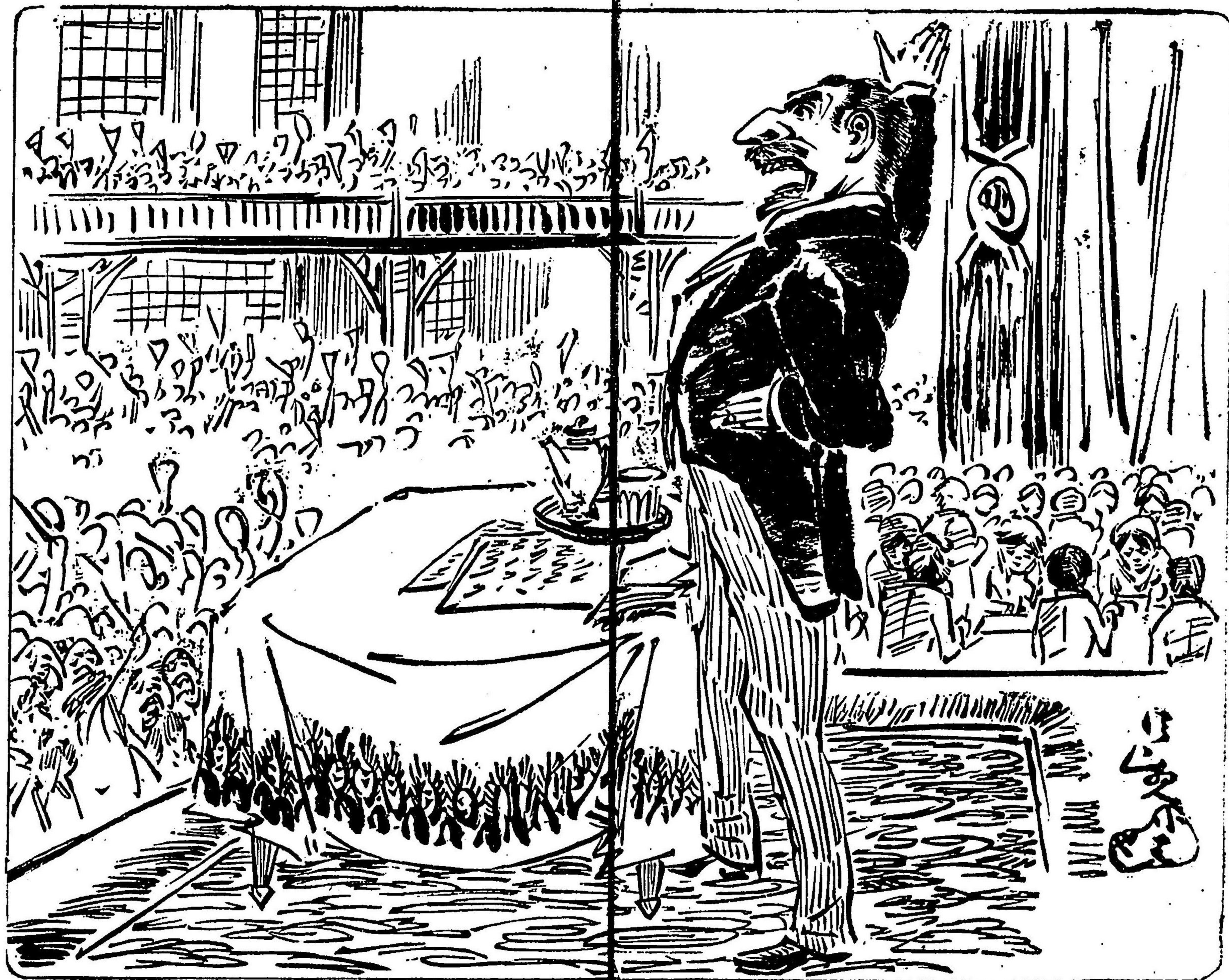
○放屁の重量を秤るの方法



附録討論會目錄

- 懶惰者は果して何物に譬ふべし乎
- 馬鹿に附くる藥劑有りや否あや
- 人は魚の樂みを知るや否なや

滑稽自慢演說目錄 終



滑稽自慢演説

附討論會

願尾 外變説
臍野 宿替 筆戲



の説

お手前様の講臺に昇るや四下を睥睨しつゝもエ
 先づ早や價例とし
 盗賊ならぬと怪面をオツゝ氣取り天井を半眼
 呼掛るはナト古臭けれと這も亦價例としあらば
 五座る倍て自負高慢馬鹿のうちと云へる世話が五座
 るが余の考へをもてすれば自負高慢は馬鹿者では五座らぬと思ひます
 に去るのみならず自負高慢は却て活潑有爲の性中にある有益のものであ
 らうと考へます开の亦何故やとありませすれば抑も人類として自負高慢の
 氣象なき者は柔弱にしてグニヤク然たること俚俗の所謂處女の腐敗

たるもの、如く其狀譬へば猶ほ精神なき傀儡人形のごとく決して物の役に立つべきものでは五座らぬ然るに苟も自負高慢の氣象ある者は必ず其性質活潑にして常に世に雄飛するの希望あるもので五座ります畢竟するに其性質活潑なればこそ自負高慢にも爲る譯合で五座りませう故に若し夫れ此活潑の性質なければ必ず亦從て自負高慢の氣象はなきものでござりますすてナ去ればこそ古來自負高慢と云はるゝ人は必ぞ其性質活潑の者であることは明白に歴史が吾人に告ぐる所での五座らぬか然らば活潑は即ち自負である高慢は取りも直さず活潑であると云ふも亦可なる理窟であらうと考へます此等の點から觀察を下して考へて見ますると自負高慢てふものは至極緊要のものであります今其一二の例證を擧示しますれば少年の初めて學に就くや先づ小學讀本を見或は「トロ」を讀むことで五座りませう然し此時に當ては未だ嘗て自負高慢の氣を生ずることなく唯々々々も無心に唱歌でも唄ふ積りて怒鳴りつ詠讀するを其務めとせら

るゝことで五座りませう然るに乞食の兒も三年経れば三歳になるとかの譬へにて此乳の香の失せやらぬ兒も何時しか知らず識らず成長して肩にて風を切りつゝも意氣揚々自得鞍馬然として往來狭ましと云はぬ斗りなる面色して歩行し自然と自負高慢に赴くに嘗て鼻汗たらしの童兒と思ひにし知人は愕然一驚を喫するの外なく兒や昨今何な書を見て居るかと問へば彼の今成りの自負高慢先生の苦笑ひしつゝも今吾の古吾にあらず僕昨今希索氏の歐羅巴文明史の原書を講究しつゝあります御老人未だ谷中の山へは出でば五座らぬかと云ふが如き問答は亦敢て珍らしからぬ話で五座ります畢竟するに人の自負高慢に爲るは其身の藝術が一步進みたるを證するに足るものであります去ればこそ自負高慢者流は男に多くして女に少く成人に多くして小兒に少く學者に多くして無學者に少く新聞屋に多くして人力屋に少なく又文明國に多くして野蠻國に少く都會の地に多くして地方村落に少なきことでは五座らぬか是れ皆な比

職上其最も優る者の方に所謂自負高慢者流は多くして劣る者の方に少な
きものでありませう(ヒヤ)大(ヒヤ)更に一の證例を示さんに向れの地方
に行くも其地に於て名人上手の職工は必ぞ自負高慢なるものにして彼奴
は大天狗なりと云はるゝ者は疑ひもなく其職に於ては必ず近隣に比類な
き巧みの職工なることは諸君も亦既に屢々實見のある所で五座りませう
(ヒヤ)然り)去れば自負高慢といふ者は至極善きものにて此氣なき
者の事に臨みて逡巡躊躇して進みて之を決行するの勇氣なきの蓋し免れ
ざるの通患で五座れば苟も人の上の人と爲らんことを欲する者は必ず自
負高慢と爲り其鼻を喜馬拉山の如く引き伸すべきだが余は茲に一の疑ひ
に堪へざる事が五座るてナ開は別事にも候はぬが此自負高慢者流を指
して何故に天狗とは云ひしものなる乎余未だ曾て其具の天狗様に面會し
たることもなく又其果して天狗なるものゝありと云ふ儘かなる論理の徴
證すべきものにも接せされば其所謂天狗の唯だ文字の上にて見るべき

のみにして實際は先づもて幽霊の兄弟分にて其之れなきに近かるべきも
のであらうとの想へども假に之れありとして之を見んに其天狗の果して
自負高慢なるものであらうか這も亦知るべからざる所ろて五座らぬか
好し天狗の自負高慢なるものとして見んは彼奴鼻が高きが故に自負なる
欺將た高慢なるが故に鼻が高き欺抑も亦鼻は高きと自負高慢あるとは別
物にして始めより相闘せざるものなるや孰れまれ迷ひの種にこそある
べしと思はれます然し余の考へにては鼻高きが故に貴からず智あるをも
て貴しとするものであらうと思ひます去れば鼻の高しとも智なき者の自
負されんことと假令鼻の低しとも智ある者は自ら高慢と爲り天狗と爲る
ことで五座りませう故に現世の人類に鼻が高く天狗ならざる者もあれ
ば鼻が低くても天狗なる者もあります次第にて随分奇異のことで五座
るて(衆皆な莞爾として微笑つし)ヒヤ)と唱ひひり)開も免まれ角ま
れ自慢天狗と云へるものは前既に演ぶるが如く至て善きものなれば今余

の自慢演説を爲すものなるが諸君も亦宜しく天狗になり給はんことを希
望致します(一方に於てヒヤ)と云へば一方に於てノ)と云ひヒヤ
ノ)の聲聴衆の頭上お舌戦す

○別嬪一隣りて火燧に温るの秘傳

諸君よ諸君今余が演べんとする所のものは天機を漏らすものにして論事
矩外の魯痴句を申す推測法で五座るが至て珍妙なる秘傳で五座りますれ
ば世間へ御漏しなきやう願ひます借て其秘傳を申すの別事にても五座ら
ぬが冬季に當り寒さを防がんとて茲に數人火燧に温らんとするに其中一
人の別嬪ありと假定めますれば別嬪普通の慣例としてイヤニ謙遜りて先
きに火燧に入ることなく皆あ々々入りて後ち同輩婦人若くは老夫等の中
間に入るもので五座る若し夫れ別嬪が先きに入るものからバ之を目的と
したる丹次郎殿の直ちにもて其別嬪の傍に隣りて入ることが出来まされ
ば別段敢て六ヶ敷秘傳も五座らぬが己れの方が先きに入りて後から入り

來るお園さんに均しき別嬪を我が隣りに入れんとするの是れを即ち孔明
具田の智畧を要する所で五座る然るに好きこそ物の上手とやらにて多年
此道に於て百千に心を碎きたる余は頗る其妙策を得たることで五座る
が實に孔明具田をも驚を喰へど云ふ明案で五座ります(自慢の後にして早
く其所謂秘傳を演せよ)五催促に従て疾く其妙策を演べませう開の別にて
も亦く己れ先ツ火燧に入ることなく先ツ誰をがな之れに入れ次きに己れ
之れに入るべしだが其入るに入り方があるのたてな最初の人先ツ東方に
入れりどあらば平凡の人なれば多くの南北即ち其人の隣りに入るを常と
するものであるが斯くては豫て目的す敵にあらで味方にせまく欲したる
別嬪を遠方へ追逃すの道理である開の亦何故とあるに己れ先ツ南に入れ
ば後に入る別品は必ず北に入るべく若し亦我れ北に入れバ別嬪の必ず南
に入るで五座りませう故に是をもて之を追逃すの道理であると云ふ譯合
なるか若し夫れ此時に當りて余が秘傳たる魯痴句さもて之れに臨めば彼

の、トウの如く其別嬪を我が隣りに吸寄んこと請合で五座る(餘談は置いて早く本旨意を演せよ)借て本旨意を演ませうに一人の先きに火燧に入りし者東方に居るとすれば己れ次に西方に入るべし然らば後より入り来るお園さんの如き別嬪は勢ひ必ず南方か北方かに入らざるを得ざる道理にて其孰れに入るも我の方が隣りに來らざるを得ざる譯合で五座りませう余が所謂別嬪に隣りて火燧に温ると云ふの秘傳と申す此妙策のことで五座るてな諸君果して如何で五座る(果然て辨士の面を打守るもあり或はヒヤ〜と喝采するもあり)

○小説と云ふて大きな事を書くを怪む

借て諸君よ諸君も既に御承知の如く世の中の事物には上が有れば亦下が有り右が有れば必ず左が有り前が有れば隨て後が有ります去れば大が有れば從て小が有るべき筈で五座りませう諸君試みに思へ見よ世に所謂小説あるものが有ります然らば亦從て大説と云ふものが有ると然るべき道理

理でありませす然るに獨り小説のみ有りて大説の有らざるは頗る怪訝のことで五座るてな余の思考をゆてしますれば假作物語を小説と云ふから之に對する議論を大説と云ふて可なるべしと考へられます开は兎まれ角まれ小説即ちノベルと云へる文字の如何なる意義を有するもので五座らうか余の常に顔面に均しき亞聖ではあく生憎に其貧乏神に取り付かれ所丈けが顔面に等しき者なれば漢洋の字典は皆な馬琴翁の顯著ある某之庫に最大切に藏し置きたれば先づもて當分火災の憂もなく此事の大の安心なれども餘り安心過ぎて今差當り其小説の字義を穿鑿すること能はざれば已むを得ず余一孤の變妙なる思想を基礎として之を解釋しませうに小説とは取りも直さず小さき説と云ふもので五座りませう斯く申せば聽衆諸君中學者先生の必ず云ふとで五座りませう辨士々々斯る愚解を下すこと勿れ小説とは強ち取て小さき説と云ふにあらま眞面目の議論に對したる嚴説と云ふ位なるものを意味したるものであると是れ亦余の百も承知

二百も合點三百はオットロノイ懐中には今あらざれども开は業に已に知了する所で五坐るが何に致せ小説と云ふからの小六ヶ敷理窟は倍て置きて取りも直さず小さき説と云ふもので五坐りませう若し夫れ小さき説と云ふて不可なるものあらば天下文字の多き宜しく迷ひなき適當の文字を施すべしだ何を苦んでか惑ひある小説の文字を下すの必要が五坐りませうや然るを小説と云ひ慣はしたるは是れ取りも直さず小さき説と云ふても宜しこのことで五坐りませう然らば是れより少しく論せねばならぬことが五坐りませう开は別でもあらぬが聖粟の實の事や淺草觀音の本體の事若くは余の膽力の事の如き最小なる事を記したるものこそ眞の小説と云ふ可きも若し夫れ釋迦ヶ嶽の事や奈良の大佛の事或は大尖塔の事の如き最大なる事を記したるもの實の小説とも云はれんもので五坐りませう去れば馬琴翁のものせられたる朝夷奈巡島記の如き未だ其島廻りの回に至らざるも其期する所の島廻りは小人島を巡廻ると云ふにあれば至極小

既と云ふに適ひせも其島を廻らんとする所の人は鬼を欺く小林の朝夷奈三郎義秀の大男なれ此點に至つて小さき説と云ふに反すと謂ふべく全く前後撞着の説で五坐りませう殊に奇怪の千万なるは南柯亭夢筆とやらんがものされたる軍書狂夫午睡の夢及び假年偉業豐臣再興記の如き偉大の巨大素的滅法界もなき空大の盛氣樓を築きたるものあれば或はもて太を餅にあらで大々説と云ふことを得べきも之を稱して小説と云ふは何となく大小の合ひざる可笑な心地をすめるなり近來に之れに類する架空の假作物語をものして之を名づけて小説と云ふもの續々出でも來るの愈々もて可笑くと思ふ所で五座るが諸君もて如何となす乎一方の片隅に於てヒヤ／＼大ヒヤと云へば又一方の片隅に於てノ／＼／＼と叫びけり

○奇言ありて而して後に又奇言あり

余は井上圓了氏をして一たびりもて喜び又一たびりもて悲み一喜一悲を

交々一時に併映せしめんと考へます并は別事にても五坐らねが奇言ありて面して後に又奇言あるもの即ち是れにてありまするが乞ふ先づ井上氏の奇言よと演べませうに該氏は近世奇人の一人にて近來耶蘇教の漸々勢力を得て佛教の將に衰滅せんとするや殆んど寢食を忘るゝまでに打歎かれ斯くては我々の名折なりとて活と憤激ならし佛教活論本論を著はさんとして先づ之れが序論をものされましたが其書中言へることが五坐ります日く「己に今日に在て將來を下するに或は知らん日本全州盡く耶蘇教と成るの日あらんことを然れども余將に斷乎として言はんとす余が一命の存する間は我三千四百九十九万九千九百九十九人をして盡く耶蘇教者と成らしむ可きも三千五百萬の人をして盡く耶蘇教者とい成らしむ可からず」と憤懣の情言外に溢れて見えます又其言の奇妙ある余の頗る之を愛讀しました就ての余も亦此奇言に従て又更に一個の奇言を吐ふと考へます日く「余が一命の存する間の我三千四百九十九萬九千九百九十八人をして

盡く耶蘇教者と成らしむ可きも三千五百萬の人をして盡く耶蘇教者とは成らしむ可らず」と三千五百萬は宜しく三千九百萬に改むべし然れども姑く原文に因る斯く斷言し來りますれば井上氏は余の牛馬に等しき愚物なることをも見棄なく早速一人の同意者を得たりとて天に向て謝し我道未だ亡びすと大口打喜ばるゝこととて五坐りませう去りながらヤソコイさうの喜びざりには致されまい諸君よ能く注意して聽給へ抑も井上氏の耶蘇教者と成らざるも余の耶蘇教者と成らざるも其單に成らざると云ふの點に於ては同一にして敢て差異は五坐らねと其耶蘇教者と成らざる所以のものに至ては大に差異が五坐ります蓋し井上氏の耶蘇教者と成らざる所以のもの深く佛教を迷信し其迷信の餘り耶蘇教を反目して其信者とは成らざると云ふ譯合で五坐りませう然るに余の耶蘇教者と成らざる所以のものは全く井上氏に異なり總て天下の宗教を嫌忌こと極天に達し耶蘇教まれ佛教まれ苟も宗教と名の付きたるもの皆な蛇蝎なり虎列剋病な

り否な寧ろ其蛇蝎虎列刺病よりも又數百千層大嫌なるものにして之を風上に置くも尙ほ且つ心地れ悪しきもので五坐れば此譯合から余の耶穌教者と成らざると云ふの次第で五坐るてナ故に余は又將に斷乎として冒はんと致します曰く「余が一命の存する間は我三千四百九十九萬九千九百九十九人をして盡く佛教者と成らしむ可きも三千五百萬の人をして盡く佛教者とい成らしむ可らず」と井上氏もて如何と爲す乎該氏此言を聞かば蓋し呆然れて亦言句なかるべくと思はれます阿々(衆皆亦雷乎)として大笑しつゝもヒヤ〜と叫びけり

○爵位崇拜をもて英雄崇拜と誤認する勿れ

諸君よ諸君も亦既に聞き及ばる、英雄崇拜の利害得失に就ての昨今頗に驚然しく云ふ所なるか余英雄不崇拜の意見を懐く者で五座りまして餘り英雄を信向致さん方で五座ります去りながら其所謂英雄が眞個偽りのなき英雄たること彼のヒトの如くフオックスの如く又ヒーコンスヒルド侯の

如くグラドストーンの如く若くハンプテンの如くジョンプライトの如き者ならしめば余は或のもて英雄崇拜を可なりとするの場合も五座りませうが是れとても亦眞に崇拜することは出来ません況してや昨今世の所謂英雄なる者は多くは眞個の英雄にあらざして爵位をもて裝飾りたる者若くは大勢に乗りて僥倖を得たる者若くは假面を被りにし者で五座ります此等の英雄は豈と其れ崇拜することを得ませうや畢竟ところ此等の人は英雄でも何でもなく平々凡々の人で吾人と同じく二耳二目一鼻一口兩手兩足を備へたる所の大の字形の者で五座ります故に世の所謂英雄崇拜なるものは余をもて之を見ますれば多くは爵位崇拜で五座る或は奮動崇拜で五座る又僥倖崇拜で五座る若くは假面崇拜で五座るて此等の者を崇拜するの是れ決して英雄崇拜での五座らぬ余をして充分に之を評さしめば是れ即ち一種宗教類似の崇拜で五座る嗚呼此等の崇拜をもて英雄崇拜と誤認するの抑も亦馬鹿々々數次第での五座らぬか乞ふ諸君よ諸君は爵位

崇拜をもて英雄崇拜と誤認せざらんことを希望します(拍手喝采豁然満堂を動かしけり)

○釋迦耶蘇ふ一本參へる

古今は永く天下の廣く五座りますれば或は善人もあれば悪人もあります去りながら善人とも附かず悪人とも附かざる中間フランサン的人物も亦敢て少なからざることで五座ります否か社會は此中間の人物をもて十の八九分を占め彼の善人と稱し悪人と名づくべき者は僅々十の一二分に居るに過ぎざること五座ります是れ論より證據面り現に然るて五座らぬか好しや一步を譲りて假に善人悪人をもて其多分を組織るものとするにも致せ其善惡の名稱の附くべきやうきき人物のあることは亦た敢て疑ふべからざるの事實では五座らぬか然るに釋迦耶蘇の說に據れば天下の人類皆な死して後は天堂或は極樂か去らば地獄に行くべしとのことにて其我が所謂中人の行くべき處の說が五座らぬ然らば其中人は果して

孰れにか行くべきもので五座りませう天堂或は極樂に行かば僥倖に過ぐると謂ふべく地獄に行かば不幸に過ぐると謂ひねばなりません思ふに中人の行くべき處がありて然るべき道理で五座りませう然るに此輩の行くべき處が五座らぬ此輩死して後の迷惑左こそと思はれます斯る不完全の說をもて其宗教の旨趣とするもので五座りませう終には彼の新小夜嵐物語の如き元祿の義士四十七士の魂魄が黄泉に行くに當り六道能化の辻なる地獄極樂の廻分に差掛り此處不苦樂の獨りと思ひつ立留るうち地獄の方より獄卒來りて地獄に引行かんとするにぞ四十七士の面々は大に憤怒あし我々は殺生派を破り人を殺せしとは云ふものし尋常一般の殺人とい大に異なり俱に天を戴かざる君父の仇を報いたるものなり然らば我々を賞譽て極樂にこそ誘導すべきに却て地獄に引行かんとし言語同斷の閻魔なりイテ其義からば閻魔の素首を引抜き吳んぞど一百三十六地獄を擊破蹂躪したるが如きことを生ぜざるを得ざるもので五座りませう此四十

七人の義士は皆な固と善人でありましたが政府の手を待たず自ら勝手氣儘の舉動を爲したるは是れ稍々不善人の所爲であります去れば義士は是に至て善悪中間の人と爲りしものと謂はねばならぬ者で五坐ります故に若し夫れ黄泉中我が所謂中人の行くべき處ならばもて義士も此處に遣はすことが出来ませう然らば彼等義士に於ても亦敢て異論は五坐らぬ道理ではありませんか然るを此處なきこゝ畢竟此の小説の起る所以にして又釋迦耶穌の説の不完全なるを證するに足るて五坐りませう又始めより善も爲さず惡も爲さず俚俗に所謂沈香も焼かず屁も放たざる中間アラレサンの人多きことで五坐りませう元來善人惡人とのみ云ひて中人を稱せざる所以のもれ固と文章上の對句に拘泥りたる偏見にして實際の社會は此中人こそ却つて多きことで五坐ります釋迦耶穌のもて如何と爲しますか抑も亦諸君はもて如何と爲します(ヒヤ〜大ヒヤ)

○妻ありて妻なき世の中の有様を寫す

余嘗て孟子を讀み今に尙ほ胸間を往來して忘るゝことの能はざるものがありまます开の他事にも候いねと伯夷の風を聞く者は頑夫も廉懦夫も志を立つるありとか云ふなるが今茲に余が寫さんとする所のものは亦夫れ頑婦も廉となり懦婦も志を立つべきもので五坐ります左は去りながら世間婦人の多き或は之を聴ても感動せざる者あるべきか道も亦知るべからざることで五坐ります去らば之を何とか云ひませうや余のまた安子順の言を引いて評さねばなりません安子順の言に稱することが五坐ります諸葛孔明の出師の表を讀みて涙を墮さる者は其人必ず不忠李令伯の陳情表を讀みて涙を墮さる者は其人必ず不孝韓文公の祭十二郎の文を讀みて涙を墮さる者は其人必ず不友と今夫れ余が是れより將に演べんとする寫眞説を聴いて涙を流がして奮然志を立てざる姉妹は其人必ず不妻なり乞ふ之を演べん抑も我邦の中等以上の所謂妻君なる者は是れ果して其眞の妻君と稱すべき實蹟の候ふべきや否な余の月頃る日頃る見の聞きつる

所をもてすれば百々に思ひ千々に考ふるも其真に妻君たる所以の實蹟の
 見るべきもの之れなしと信じます開の又何故とあるに抑も人の家に来り
 て妻君と成るは夫婦共に縁くが爲めでありませう又其縁くとまでには至
 らざるも家内の瑣事は妻君の務めにこそ五坐りませう畢竟するに多少家
 内の便益の爲めにこそ妻君を迎ふる必要は起りたる譯合で五坐りませう
 去るに我邦中等以上の妻君は朝起き上がりれば床の早々下女のさたり疊む
 わり且つ既に飯の炊ぎ魚肉野菜の割烹料理は下婢の整へて待つあり又坐
 敷の掃治は中側と名づくる者之を整へて待り斯くて面洗のんとなせば
 既に湯水は酌みて備へたり故に唯だ手を伸ばして之を洗ふのみ朝飯を食
 せんとすれば下婢若くは中働が來りて給侍を爲します既にして朝飯果つ
 れば煙草を喫して雑談に時を移すうち早くも午報に打驚かされて朝飯と
 同じく下婢の調理をもて午飯を食し既に午飯了のれば霎時假寝の枕に午
 睡を催ふし偶々用事のわれば馬車人力車に歩を托し下駄の出入は下婢之

を爲して妻君のお手を下さんこととで五座りませう聽て家に歸れば折しも夕
 飯にして夕飯終れば三絃鼻歌に打戯れ折々夜席に行き芝居に遊び或は遊
 山見物美衣美食思ひのまゝにて起きては食し食しての復た寝ね衣服の裁
 縫にはお針を雇ひ偶々小兒を産めば乳母を置き之れに托して相聞せど人
 ありて玄關に訪ひ來る者のわれば書生若くは下婢の取次ぎて妻之を知ら
 せ故に固と便益の爲め終身の家務を助けんと欲して娶りし妻君あるが爲
 め却て下女の一人位増して雇はねばならぬ主義となるより眼を着けて
 見れば此所謂妻君の是れ手なく足なく又耳なく口なきには非らずや豈と
 亦普通の人間で五坐りませうや取りも直さず一種の傀儡人形で五坐りま
 す(兼皆な莞爾として謹聴々々と叫びける)然るに茲に唯だ纒か一事の用が
 あります閑門の勤務即ち是れにて五坐りませう去れば此等の妻君は之を人
 の家に妻たるが爲めに来りしものとい謂ひ難う五坐りませう是れ體裁の能
 き一種娼妓の類と謂ひねばならぬこととで五坐りませう(ヒヤ)嗚呼亦何

たる習慣で五座りませうと思ふて茲に至れば亦涙の外は五座らぬ今日此傍聴即ち本書の讀者諸君中には往々婦人も見受けらるゝやうなるが其中等以上の妻君方には少しは感奮する所が五座りましたるや余は其情態の賤劣ある悲むに堪へて亦舌も動かさなりました隠論旨に感動して黙然たる者あり或は例證の奇抜なるに笑ひを催ふしつゝも思はせヒヤ〜と喝采しける者もあり

○地震雷火事親爺は四恐を防ぐの家屋なき乎

世の中の事物の偕て儘ならぬもので五座りまして北廊立れば埋地が立たぬ埋地立れば北廊が立たぬと云ふ譯合て殆々困却の至りで五座るてナ爰に我邦の家屋の家根の俚俗に所謂地震雷火事親爺の四恐を防ぐことが出来て甚だ翹呑至極のこととて五座る非の別にてもあらぬが第一瓦家根は地震の恐れがあります去ればとて此地震の恐れを防がんとて銅鐵若くはブリッキ等金屬の家根に替く時は成程地震は防ぐことが出来ませう然し金

屬は雷公の好物と聞き及びつれば夏時の怒ち雷を吸寄するの恐れがあります去ればとて此雷を防がんとて電氣の最も傳はり遠き板をもて家根を替かばもて成程落雷の憂ひは避くことを得ませう然し片々然たる板の最も火附きの早きものなれば之れが爲め火事の恐れありて遠方の火事も風下なれば隣家の火事と同一にて安心のあらざることで五座ります然らば甲を防げばもて乙の恐れあり又乙を避くればもて丙の憂ひありて到底其中孰れか一の恐れは免かれんと云ふ譯にて甚だもて危険の至りて五座ります去りなから何うやら智慧を絞つて振ったならば或はもて地震雷火事の三恐は之を避け防ぐの工夫なきにしもあらざることとて五座りませう去ながら獨り最後の親父の一恐の到底之を避くことは叶ふまじきことで五座ります開の亦何故とありまするに彼れ地震雷火事の三恐は何れも皆な其恐れ外にあるをもて之を避くるに由ありと雖ども獨り親爺の一恐は其恐れ内にあれば之を防ぐに由なきには殆々困却の至りで五座ります

(ヒヤ) 昔し管仲は豈に安處かからんや我れ安心なきなりと云ひしかども是れ管仲我れを欺きしなり我れ既に安心ありと雖ども安處なきこと此の如くでは五座らぬか之れを思へば梁の下にも亦寝ねながら桑原々々萬歳樂々々々嗚呼亦凄然の世の中なる哉(ヒヤ) 大ヒヤ)

○軍書の不都合の廉を攻撃す

余の世間に流行する軍書中往々不都合のありて存すれば今之を攻撃せんと考へまそ第一太平記と云へる表題を命じたる軍書あるが不都合で五座を開く亦何故かとあるに抑も太平とい天下無事平隠の世を云へる稱呼で五座りませう然るに戦争記を著して之れに太平記と題するは是れ豈と亦奇怪のことでの五座らぬか(ヒヤ) 又何れ彼れの差別なく軍書たるもの常に記する形容の文句に某役何れの軍勢金鼓器すく進撃したり云々と云へることが五座るが是れ亦不都合の甚だしきもので五座りませう開く亦何故とあるに諸君も亦既に御承知の如く鼓は進軍の器にして金即ち鐘

は退軍の具で五座りませう然るを如何なる野呂間の大將なればとて又如何に周章狼狽たればとて其進退の兩器を一時に打鳴らしつゝ進撃するの間扱はなく又斯る頓馬は之れなきこととて五座りませう然るに軍書記者中には此の如き頓痴奇客ありて此等の文句を書き立つるは如何にも馬鹿々々敷次第と謂ふべし(ヒヤ) 借て又軍書中敵の陣營などへ火を掛くる時に必ず折節何風烈しかりければ云々の文句あり然れども火を掛くればとて必ずしも烈風の起ると定まりたるにもあらず然るを必ず斯くのみ一定に記するはナト形容に過ぐると謂ふべし尤も敵の陣營などへ火を掛くるは或の風ある時を窺ふの場合ありと雖ども火を掛くるに主とするもの其時と勢ひとよありて敢て風の有無に關せず固とより風のある時に越したることいなければも其時と勢ひとにして悪しかりせば假令風ありとも亦何の用にも立たず故に敵の陣營などへ火を掛くるは第一主とする所の其時と勢ひとにありて存するものなれば火を掛くる時と雖ども或は風

あることもあれば又或の風なきこともあるて五座りませう然るを其時嫌
らはずに折節何風烈げしく見るくうちに満陣火焔となりけるなど
書き立つるは實に不都合極まることでの五座らぬか(ヒヤ)此他軍書
中の不都合を擧れば尙ほ數多くあることならんが余は今茲に本論の局を
結んで他日折を得ば復た再び論ずる所あらんと考へます(ヒヤ)大ヒヤ)

○畫工の思慮の小あるに驚く

畫工と云ふ者は固と學問もなければあらぬことだが倍て思慮も亦なくて
叶はぬもので五座るてナ此等の事は言ふまでもなきことにて諸君も亦既
に五存じのことで五座りませう然るに畫工が月景を畫くを見れば新月即
ち三日月か去らざれば満月にして其餘の月景を畫くことは殆んどあるなき
ものゝ如くあります然し社會の出來事夜分に起るものゝ必ぞ三日か十五
日に限ると云ふの理もなきことで五座りませう然るを何でも漢でも三日
月と満月のみを畫くは實に淺薄なことでは五座らぬか尤も狐や狸の近傍

に畫き添へる月の三日月でも満月でも敢て差支はなければども若し史上の
事蹟を畫くには必ず其定まれる日のあることなれば三日月と満月とのみ
畫きたるにては甚だ不都合なる場合少なからざるをて五座りませう故に
余は畫工に注文して弓張月等他の月景も畫かれんことを望みます(拍手喝
来)

○造化無言の教誡

諸君よ諸君の吾人の身體に何故に二ツの耳と二ツの目あり又二ツの手と
二ツの足ありながら口は唯だ一ツなるか其所以を五存じで五座りますか
是れ造化無言の教誡で五座ります開は亦何故ぞとありまするに先づ耳の
多く他人の語を聞き其善なる所を用ゐて我が身の利益と爲すべし去らば
一個にては或は不便あらんとて二個を授けたるものであります又目は多
く天下の庶物を見てもて智識を擴むべしとて二個を與へたるものであり
ます倍て又手は多く働かして家を興し名をも揚ぐべしとて二個を授けた

るものであります又足は能く歩行きて其用を辨すべく或は多く運動して
 身體の健康を保つべしとて二個を興へたるものであります然るに獨り口
 は唯一個にてあります抑も何等の故て五座りませうか是れ言はず語
 らざ口の福ひの門多辨してはならぬと云ふ造化無言の戒て五座りませ(ヒ
 ヤ)且つ夫れ耳目手足の各々二個づゝあるが上にも亦其役目の各々唯
 だ一種づゝて五座りませ然るに獨り口は唯だ一個あるが上にも亦其役目
 は二種ありて物言ふの用に兼ねて飲食の用が五座りませ去れば口の餘程
 飲食を節し言語を慎まされば造化無言の原旨に背くの恐が五座りませ(ヒ
 ヤ)大ヒヤ去ればこの世の諺にも亦舌は二枚に使ふと云ふことが五
 坐るではあらぬか(ヒヤ)是れをもて之を觀ますれば造化の深意の技に
 盡さず益々深遠なる御意のあることが推測せられます开は別あても五坐
 らぬが之を要するに身體の中央にあるものは何れも皆な一個づゝにして
 且つ二種の用が五坐る然るに身體の左右にあるものは何れも皆な二個づ

とありて且つ一種の役目に止まりませ去れば左右にあるもの何れも皆
 多く使用をべくして其中央口なるもの何れも皆な之を使用すること
 少なかるべきもので五坐るてナ身體の中央にあるもの壹に唯だ獨り口の
 みならんや乞ふ諸君慎み給へよかし造化無言の戒めなり故に余も亦無言
 をもて唯心傳心の演説を爲しもて諸君を戒むるもので五座りませ(聽衆中
 或は造化の深意を推測し莞爾としてヒヤ)と叫ぶもなり觀ひ其深意を
 解せざして茫然自失するもあり要するに思慮の深淺にあるのみ)

○聽衆は喝采を得る演説の妙法

通例演説中次ぎの考へ出でざる時は孰れも皆な先づ盞子の水を緩々と飲
 んで考ふること五座りませう是れ最も拙劣なる思考の法でありますして
 少し長く水を飲んで居りますれば忽ち聽衆より水はエー加減にして置
 きやれど一本喰ふことであります此刺筆を一本喰ふと胸間に鼓動を來
 し次ぎの考へが出づればこそ益々澁り滞りて果ては結局をも付けざして

聴衆より擯下されることで五座ります然るに茲に演説中滯滞して次ぎの考へ出てさる時管に次ぎの考へを工夫し得るのみならず福ひを轉じて却て福ひと爲らしめもて願る衆の喝采を得るは妙法秘傳が五座るて十开は別事にてもあらず乞ふ先づ一例を擧げて後ち舒に之を示しませうと考へます近時英國にて克拉達斯頓内閣の時申すまでもなく當時克拉達斯頓の名望は頗る高く彼の比的氏以後吾人の聞かざる所にて其聲譽響へんに殆んど物なきが如くなりけるが此時下議院に最も調辨の一議員ありましたが此人議場に於て常に衆人の喝采を受くること甚だ盛んでありましたれば或人怪んで其人に向ひ子は常に衆人の喝采を得るの甚だ盛んなるは如何なる術あるものなるにやと問ひたれば其人答へて書へるに其疑ひは尤ものことなり予の子の既に知らるゝ如く調辨の最も甚だしきもので五座ります既に調辨であります故に議場に於て演説討論するの際舌溢りて次の語の出でぬことがあります然る時は已を得ず予が最も秘密の法た

る吾黨改進黨の首領の高名を拜借し來りて直ちに一聲高く克拉達斯頓と大呼しませすれば衆耳は此克拉達斯頓の聲を聞いて忽ち感動を起して餘事を忘れ其辨の調あるも亦忘れ思はず知らず喜悅喝采するが故に其間に何を演ぶべきや緩々之を思考へ稍々衆の拍手喝采の靜るを潮にやをら揚々次ぎの事項に移りつ演説することでありませ之を思へば笑止の外なきこととて五座るが這ハ極内のお話なりと物語るを聞いたる質議者も亦雷笑しけるが終に感極りて立別れけるとなん云へることが五座るが諸君豈と奇妙な法てハ五座らぬか(衆皆な莞爾としてヒヤ)と叫びけり然らば是れに由て工夫をしましたなれば何の演説にても各種の聴衆に應ずるの喝采を得る妙法が發明せらるゝこととて五座りませう开は亦如何にしたら宜しからんと云ふに別段六ヶ敷こともなく唯だ人を見て法を説くもので五座るてな例へば舊自由黨の壯士若くハ昨今大同團結の意々連に對しての演説なる時は敢て小ハテ取重學的の演説は彼輩思想の解し得べきものに

もあらざれば終には欠伸の種となるの恐れあり此人々の打喜ばるゝは
 由民権と云ふ言葉にあれば何んでも徹頭徹尾自由民権よと大呼さるす
 れば夫れにて喝采を得ること疑ひなく若し舌の溢りて次ぎの語の出でざ
 る時も亦同じく自由民権と叫ぶか去らずば板桓伯後藤伯等の姓名を大呼
 すべし然らば喝采を受くること必せり其間をもて静々次ぎの事項を考ふ
 ること最と易き業で五座る是れ猶ほ彼の眞言宗の説教師が一言一句に南
 無阿彌陀佛と唱ひて衆徒を感動せしめ法華宗の説教師が南無妙法蓮華經
 を喝采の種にするがごときもので五座るてな去れば其他の人の喝采を得
 るも亦容易き業でありませう彼の何の友とやら云へる雑誌の記者は新日
 本の青年よ肥肥せよ日本社會の氣運風潮は既に平民的の運動に傾きたる
 を肥肥せよ等の句調をもて神田本郷の下宿屋の樓上破窓の下に呻吟しつ
 とある白面書生の喝采を得るの種とするでは五座らぬか吐嗟亦笑止とは
 云へ其人を見て法を説くは感服致します(衆皆な掌の破るゝと打忘れて拍

手喝采せり)又嘗て四號文字にて老人眇目者流の喝采を得たる某新聞の近
 頃五號文字と爲りまして老人眇目者流のお小言の喰ふものゝ又依然思想
 淺薄なる無禮突出の放膽文を草するは是れ該新聞の喧傳建立なる田舎漢
 思想淡泊なる者の喝采を得んが爲め秘策で五座るてナヒヤ〜大ヒヤ
 又娘小供の喝采を得るには福助菊ちやん等を譽めねばならぬことに
 て何んでも音羽屋成駒屋等の名を多く書へば是れにて喝采を得ること
 疑ひなく若し舌が溢りたならば一聲叫んで音羽屋とても云ひて各女の喝
 采する間に後を考へべしだ兎角人を見て法を説き今集ひし聴衆の何んな
 ものを信仰して居るか开を察してもて其至緊至要の語を折々唱へるは演
 説者の秘傳で五座る(拍手喝采滿堂を動かせり)

○造化自然男女本分の區別

諸君よ諸君も亦既に知らるゝが如く今來男は髮の鬘を結びさることにて
 其代りには各々帽子を冠ることで五座るが其之を冠るや成るべく的前へ

の方お冠るをもて粹と爲して其後ろの方に冠るをもて不粹と爲します然るに女は全く之れに反して其鬘を結ふを成るべく的後ろの方に位せしむるをもて粹と爲し其前への方に置くをもて不粹と爲しますは是れ何等の所以に由りて然るの差を生じたるもので五座りませうか是れ造化自然の教へにて男は衆の前へに出でし人の尻に居らざるを貴むものなれども女は然らず成るべく的人の後に引き込み居て前に出でざること頭髮に差したる鬘甲の龜に均しからんことを重んずるもので五座りませすればでありませ造化自然の教へは豈と亦奇なることて五座らぬ乎(ヒヤ)

○支那史上の好人物を買ひかぶること勿れ

古來支那の人物と他邦の人物と史上に於て同等に見ゆる人なれば开い必ず他邦の人物が一等優るの人で五座りませ是れ偏頗なる説の如くなれども決して左にはあらぬもので五座る开は亦何故ぞあるに支那人は法螺を吹くこと其性質持前にして少しく好人物なればやたら無暗に法螺にて

之を吹き揚げ終に其人の價値を増し柳原の古着か鳥の町の熊手あらねども頗る掛直に掛直したる所の高名で五座りませれば史上に於て他邦人と同一の者でありましたならば其支那人の正味正當の所は他邦人より遙に劣る所の人物で五座りませて大嗚呼支那の歴史は容易に信せられんもので蓋し其話し半分にも聞いたならば或は當らずと雖も遠からざる所で五座りませう乞ふ諸君支那史上の好人物を買ひかぶること勿れよ(拍手喝)

○ホンニ屁はやりか話

諸君よ諸君も亦定めて経歴のあることで五座りませうが今夫れ何方に行かんとて途上に於て食物消化の糟粕の團理に遭遇しましたならば夫れはホンニ人皆な愕然として大に驚きつゝも之を避ることで五座りませう然るに焉んぞ知らん其米に異れるものを避けて逃る者も亦其腹中に若干の米に異れるものを貯藏する者ならんとは實に抱腹絶倒の至りでは五座らぬ

か故に彼の途上の糞は之を避け得るも己れが腹内にある糞は決して避け得ることは出来ません試みに思へ其人にして一步を逃れば其腹内の糞も亦一步を追ひ二歩を通れば二歩を尾し到底逃遁ること能はざるでござりませう彼の途上の糞も我が腹内にある糞も糞は脚ち糞にして敢て異なる所は五座りませすまい唯だ其異なる所の米に異なるのみで五座りませう(乗皆な莞爾として微笑つゝもヒヤ／＼と呼はりける否や唯だ腹内の糞の糞か紙に均しき皮肉をもて之を掩蔽までの差があるのみで五座りませす而て又腹内の糞は如何に深く其人に懸慕したるにや終身離れまいとの抱若荷にて寸毫も離れませんと云ふ主義だが若し之をしも嫌忌ひ腹中一塊の糞をも止めず悉皆之れに退去を命ずることあらば其人も亦早や此娑婆の者ではなくドロンソンの幽霊とはあらるゝこととて五座りませう諸君豈と亦奇怪のことでは五座らぬか(乗皆な腸を外し臍の宿を替へて拍手喝采しけり)

○男女の關係を知る心理上の魯痴句

諸君よ事は争ひれんもので如何に其人が有る無しと云ふも心理が體容をもて語るは亦如何とも爲すべからざることで五座りませす之を英語インスピレーションと申します今夫れ茲に少男少女のありて其關係の濃かなると否などは深く胸中に藏して局外者には殆んど知るに由なきが如くて五座りませしても一たび其人に對して誰さんは汝に懸心ありとの問ひを掛けて見れば直ちに其本直が解りますす开は亦何のやうに解るものとありませれば此の如く誰さんが汝に懸心ありと問ひ其人これに應へするに平凡なれば其誰さんど何の關係もなきことが知られます彼れ若し鼻をもて之れにあひしきひますれば其誰さんと大に嫌忌ひて居ることが知られます若し亦之れに答ふるに喜色がありましたならば陰に其誰さんを想ふて居ても未だ其情の相通せぬことが知られます若し亦怒氣をもて之れに應へしましたならば既に情相通じて居ることが知られます是れ争そふことのないならざる心の作用にして如何に本心に逆へんとするも到底逆ふことのない

ざることであります是れ普通論理の外の魯痴句にて人の心を知る所以の方法で五座れば諸君忽せにな爲し給へず(ヒヤ／＼大ヒヤ)

○娘か嫁かを知るの推察

前には男女の關係を知る心理上の魯痴句を演べて大に諸君の喝采を得ましたることあるが今又余の技にホンの娘か嫁か彼等の口を開かざるに之を推察して誤たざるの法が五座るとナ开は別にもあらぬが今夫れ茲に熊公と八公とは各々兩手を懷中に差入れ臍下三寸斗りの處を小高くして箆下に居るは如何様此陰囊こそ大切と摺り居るものと知られたるが往來を東西する老若男女を見て頼りに認もて品評しつゝありけるが聽てぞ遙か彼方より老娶と新造とが此方を指して來るあり然るに又數間を隔てし同じく老娶と新造とが來るにぞ熊と八とは微笑みつゝも舒々品評を始めけるが熊の八に打向ひ秘語くやうヤイ八や汝は彼の兩方の新造を何だか知ッて居るかへ先きなる一組の中の新造は彼の老婆様のホンの娘だが後

なる一組の中の新造は彼の老婆様の粹の嫁だわへ八は開いたる口を俄にへの字形に閉ざりや亦何ういふ譯でと云へば熊はそりや解りきつた話だわ开は亦何故とあるに先きなる一組は新造が先きに立ちて老婆が後から行くではないか是れ問のをも知るべし我が娘の菫を見よがしにて自慢にも新造を先きに立てたるもれたわへ借て又後の一組は老婆が先きに立ちて新造が後から行くではないが是れ姑婆の人情にて我家嫁女は憎々さよ宜しく後より附添て來ませると口には書はねど習慣にて斯くは先後の區別があるものだらう何うだ八や左様いふ理屈じやないか八は大い感服してろりや汝何處でか聞て來たのじやないかと云へば熊は左様いや！仕方がない實に横町の先生に聞た話だがまア道理は左様じやないかと云ふは今余が熊八の品評に借りて娘か嫁かを知るの推察法だが諸君は如何思ひます乎(衆皆な感じ入りてヒヤ／＼と叫びけり)

○笑の說

笑の呪と申しましても彼の笑ふ門には福来る笑つて損したるは宿屋の小僧ばかり蒲鋒屋腹立ちまされに精を出す等長崎からアラ下づた古懐鼻揮を洗濯するものでは五座らぬ諸君よ夫れ唯た一口に笑ひと申せば可笑きことは皆な笑ひにして何の區別も五座らぬが若し之を化學士の手に掛け分折しますれば種々様々色々雑多な笑ひがあります今試みに其大略を示しますれば第一は雷笑と云ふものがあります這は何かの見聞したることとが奇しく妙へに珍にして人の心の官を衝動かして之を狂はしむるより斯くの雷笑せしむるもので五座る偕て第二の右に反對したる微笑と申すものでありまするが是れは彼の八犬傳に竊聞したる龜篠のやをら紙門を推扉きて彼の種々の聘物を願もて數へてうち微笑み呷芽出度の結納やと云へるが如きを指すもので五座る都て何か心に嬉しくて堪へられぬことのありし時微と笑ふを微笑との申すもので五座る偕て又第三の冷笑と申しまして俗には之をせゝら笑ひと申して人を愚弄する時にフ、ンと笑ふ

を云ひまする偕て又第四は苦笑と申すものでありまするが這は至て奇怪の笑ひで五座りまして固と己れの氣に喰はぬことを其場の時宜の已み難く否々ながらに笑ふもの之を苦笑ひとの申します偕て又第五の顯外し臍の宿替抱腹絶倒笑止千萬と云へるものでありまするが是れは其可笑き極まりて笑聲も出でずなりし狀を申されまするもので五座ります偕て又第六は愛嬌笑と申しまして別嬪などが憎からぬ丹次郎さんを斜眼でチラと白眼み莞爾として笑まるゝを云ふもので五座ります偕て又第七はお世辭笑と申しまして固と可笑くも何ともなきことを強ひてオホ、ハ、ハ、と高く打笑ふも亦可笑く是れ婦人に往々ある所で五座ります其他又種々なる笑ひもありまするが先づ概して以上七種のものが世間の笑で五座りませう(兼皆な莞爾として微笑みけり)而たが又茲に至て忽せにすべからざることで五座るてナ开は別事にても五座らぬが唯だ一口に笑ひと申せば自他の區別が知れませんが能く、笑ひに意を注いで見まると人を笑はし

むると人に笑はるゝとの相違がありまする是れ往くと復るとの差別がありて至て大切のことでありまする人を笑はしむると人に笑はるゝとは其形ちはチヨツト相似たるやうでは五座るが其實大なる相違がありまして人を笑はしむるの固と自己が意志をもて人を左右するものでありまする語を換へて言ひますれば我れに對する人を一種の器具として己れが思ふがまに／＼笑はしむるものであります然るに人に笑はるゝものは自己に何か尋常ならざる缺典のありて人の爲めに夫れ見やしやれ彼の人の可笑さよと打笑はるゝもので五座りますれば此場合に於ては自己は却て人の器具たるもので五座ります故に人に笑はるゝが如き者の到底人を笑はしむることは出来んことでもあります余の終りに臨みて一事の演べざるを得ざることあり開の別事にてもあらぬが演劇の悪漢が笑ふはフ、ハ、フ、ハ、フ、ハ、フ、ハ、ハ、と斯様に笑ひまするが這は随分共に一種變妙の笑ひ方にて何とも名の付くべきやうなきもので五座るが強ひて之れに名を命じたならば或は作笑とでも云ひませうか借ても奇怪の笑ひでは五座らぬか(兼皆な願を外し臍の宿を替へてヒヤ／＼と叫びけり)

○馬鹿者亞米利加の近道を求む

諸君よ諸君も亦既に五存じのことだか何だか余は未だ諸君の胸中を覗ひませねば知れぬことなれど佛蘭西の俚諺よ一人の馬鹿者があれば必ず之れに感服する更に其又一段上の大馬鹿者があると云ふことがありまするが近く我邦にも亦是れに類する痴事が多く五座ります中にも或る馬鹿者は亞米利加に到らん近道を求めんとて種々工夫を凝したるの末亞米利加は圓體なる我が日本の眞下に當れば這は漁船をもて遠く太平洋を迂廻するにしも及ばぬこと好しくやまの手の井戸屋を頼みて深き井戸を堀り亞米利加まで貫きて上より繩にても持ちたるまゝ彼の穴に下らバツ、ハ、ツ、と一降り亞米利加まで達することが出来ん是れ至極輕便の發明なり也昨今往々聞く所の話で五座るが之を聴く人々の何れも皆な感服

して之を聽るゝことでありませう是れ即ち一人の馬鹿者があれば必ず之れに感服する更に其又一段上の大馬鹿者があると云ふもので五坐る開の亦何故とされれば是れこそ諸君も亦既に知らるゝが如く物に引ける力があるもので其力の地球の中心を本據とせらるゝもので五坐ります去れば今假に彼の馬鹿者が山の手の井戸屋を頼んで日本より亞米利加まで突通しの穴を穿ちたりとして見んか茲に奇怪の千萬のことが上坐るて十開の別事にてもあらぬが一方と申すものは其物の中心を本據として周圍の庶物を引き寄せるものなれば彼の馬鹿者が亞米利加に到らんとて穴より降るに地球の中心までは成程下ることか出来ませう去りながらこれから先き亞米利加の方へは下るにはあらで上るものとなるでありませ何となれば是れまでは地球の中心か行く先きにありたれども是れよりの地球の中心は却て行く後にあれば先きへ引かるゝのではなく後へ引かるゝものであれば五坐るて

ナ面で見ると彼の馬鹿者の地球の中心までは何の障礙もなく地球の中心の引力に吸寄られて行くことを得るも夫れより先きへ行くことを得ず去れば彼の馬鹿者の此處に止り行きもやらず戻りもやらぬ初め亞米利加の近道へと志したるもの亞米利加へ行くこと能ひて却て地獄の近路へとてい達し此處に往生遂げるゝ如何にも笑止千萬のことあるが斯る不都合のお説に感服する人々の馬鹿らしさは亦格別のものにて遂に余をして此一席の演説を爲さしむるに至りしもので五坐るが豈と諸君馬鹿々々敷話での五座らぬ乎(衆皆な雷笑して拍手喝采しけり)

○億兆人民東西南北の所有地皆な其境を接せ

世人の眼力思考は常に皮相に止りて其肺臆に達せざれば宇宙に種々面白く至妙なる事あるも皆な之を看過して意を注がざるもので五坐るが今茲に最も面白く最も至妙なる事こそあります開の別事にてもあらぬが地球の表面には億兆皆ならず實に無限りもなき最夥多の土地所有者あること

で或の東西に隔り或の南北に離れ或は十百里を遠ざかり或は數百千里を異にするが如く見ねまするが這は唯だ其表面に於てのみ斯くの距離を隔てぬることにて若し夫れ地下所有の極端に行かば秦越の遠きは借て置き南北兩極の遙かなるも皆な是れ寸歩も離れぬ近隣にありまする开の亦何故乎とありまするに諸君も亦既に五承知の如く此地球は球形なるもので五坐りませう去れば我が日本にも土地所有者なれば又其反面に位ぬする亞米利加にも土地所有者あることなれば互に土地所有權は地球表面の下凡そ一千五百里餘の中心にてお互に衝突りたる處に極點となしたる錐形に止まるもので五座ります抑も此極點の中心の地球億兆土地所有權の境界相會する所にして皆な此所に至て隣家の如く相接するもので五座りませう(聽衆中稍々思想ある者は謹聽々々と唱ひけり)是れをもて考へて見ますれば彼の四海は兄弟五族は一家なりと云へる格言の如きは正しく其理あることと察せられます然るに茲に一事の思考を要することがありま

する开は別にてもあらぬが此の如く億兆の方角より一處に會する土地に於ては定めて日々境界争のあることと五座りまして其裁判は彼の閻魔の廳に於て之を裁斷することと五座らうが閻魔殿には噓かし善き顕微鏡にても所持なされ居ることと察せられます之を思ひ之を想へば諸君豈と奇異のことでは五座らぬ乎(衆或は掌の破るしを知らず舌の爛るしを覺はすして拍手喝采するもあり或は感極りて默然たるもあり何様千古の奇説と見たり)

○孟子々々お前さんソリヤ聞はしません

此の如く奇々怪々ある題案をもて一説を試みんと致しますれば諸君は定めて奇異の想像を爲し辨士に這は亦何をか演んとするものぞやとのお腹問を爲しつゝあることと五坐りませう去れど其れ之れ此の如き題案を設くる所以のものは抑も其説ありて存することと五坐る余が考へをもてすれば方今我邦書生の遊蕩は多くは孟子殿の誘導く所に致しまして其改心

して笠雪の窓に歸へらんとする折りしもやをら雲時待ち給へど之を引さ
 止めて尙ほも遊蕩に日を暮さしむるは是れ亦同じく孟子殿にて五座る孟
 子々々お前さんソリヤ聞にまぬ傳兵衛はんにいあらで矢張孟子さんお前
 はんも餘程の茶人じやないかいな諸君よ諸君も亦定めて多少の經歷のあ
 りしことでありませうが書生遊蕩の始めを見まするに數輩の相會するや
 一生言ふことあらん喃諸君聞き給はずや日頃ろれ勉強も亦生命ありての
 物種ならずや勉強のみして居ては生命の堪るものじやあいか斯く佳人の會
 したるこそ幸ひ諸君なんと散歩運動して宜しく浩然の氣を養ふに意なき
 やとあるに乘皆な這の妙々と言ひつゝも賛成しぬるにぞ然らばと打立ち
 此處彼處と何かの魚針に掛りし如くフラ〜と散歩を始めけるが何の目
 的もなく彷徨たればとて取て面白きものにもあらねば此邊で牛でも腹に
 葬らうかと言へば一生の云へるやう牛屋も餘り殺風景なれば何處か半會
 席にて一猪口やらかさうじやないかとの動議起れば又一方には半會席

は餘りに淡泊過ぎていかんじやないか諸君なんと北廓か埋地の何うだへ
 賛成する氣はないかい衆生皆な賛成を表するうち一二の書生の云へるや
 う北廓もチ、古めかしければ埋地へ行ふじやあいか衆生皆な此議に一致
 なし聽てぞ歩を東方に向けるよと見えましたが通ひ慣れたる堤防八丁に
 あらで来た通ひ慣れぬ海岸十餘丁も瞬間に飛ぶが如く行き〜〜樓に
 登りソナヤン遊び騒ぐうち早く數時間を経過したるを思ひ付きにし一
 生の云へるやうの僕は寄宿生門限あり諸君是れにて許し給へ遊王曰く君
 今更らソナヤン事を云ふは卑怯なりソリヤ否けん君其れ五十歩をもて百歩
 を笑はし如何と云ふことの何とやら道理らしく聞ゆれば之れに抗論もな
 り難く五十歩より百歩に進み百歩より二百歩に入り終る二百歩より五百
 歩、五百歩より千歩と倍々深海に陥りて出づること叶はずあり給ふの原
 因はと云へば孟子の誘導にして其遊蕩を引留るも亦孟子の爲す所では五
 座らぬか之を思ひ之を想へば孟子の仇おれ怨みなれ一方にヒヤ〜と云

へハ一方にノ一ノと云ひヒヤノ一ノの聲聴衆の頭上に舌覗せり

○鼓女の解

諸君よ諸君は世に鼓女と云へる最と奇怪の女があるを五存じでありまするか諸君は定めて後辨天前不動二度喫驚と云へる女のあることを五存じて五座りませう既に之れを五存じとあらば余が所謂鼓女とい取りも直さず其後辨天前不動の二度喫驚の女を異名するもので五座る是れ余一人之を鼓女と申すのみでは五座らぬ都て我々釋人社會では皆な之を鼓女とい申し侍りつるもので五座るてナ衆皆な莞爾として微笑するうちにも二三の傍聴人はヤ一辨士一番材木屋の盜賊と出掛けたナと叫びけり(开は亦何故予どのお尋ねて五座りませう茲ぞ其解を要する所であります今夫れ熊八若くは彌次喜太等二三の洒落人の市中を徘徊する時或は一步前に小釋の髪をげは襟下に位りて鑿ひこぼるゝ油の香の風がもて来て鼻を穿つに予熊八の共に陶しくイヤ一と感歎の聲を揚げつ這い如何なる窈窕の輝

娟にかある一には生前の面目一には生命の洗滌一目だにも見まはしと私語つしも用なき足を早めつ彼の女の先きに出でつやをら振向きて之を打見やれハ顔と鼻と颯との三ッは最と平らかにして雨の頬は最と満だみて其色さへに赤ければ熊八のホーと云ひにしまし呆然て亦言句もなかりけるは是れ豈と一種の鼓では五座らぬか开は亦何故とあるに先きにイヤ一と感歎したるハ是れ即ち大皮の掛聲では五座らぬか又後にホーと呆然たるは是れ即ち小鼓の掛聲では五座らぬか去れば此女の畢竟一種の鼓たることハ亦明かにして余が之を鼓女と云ふも亦此謂ひで五座るてナ諸君果して悟合點が参りしや否(衆皆な抱腹絶倒してヒヤノと叫びけり)

○酒亂の解

酒亂とは是れ果して如何なる意味で五座りませうか即ち酒を鯨れ如く飲みしより狂ひ亂れの結果をや云ひにしもので五座りまする而たが這は是れ一般普通當面の解釋で敢て珍らかなることもなきことで五座ります余

い今此酒乱しゅうらんの解かいを爲なす最いと奇妙きせうなる點てんより解釋かいしやくを下くだすもので五坐ござる开ひらは如何いかなる珍ちんなる解釋かいしやくなるかと云いふに別べつにてもあらぬが深く酒さけを飲のみにし者もの太たいく坐ざ上じやうを狂くるひ廻まり當あたるを幸さいひトヤトヤ乱らん暴ぼうするも遂ついには酒氣しゅうき全身ぜんしんに感かんじて身動みんどうもなり離はなれ酔よ臥ふし雲時うんじ時刻じこくを經へて酒氣しゅうき醒さめやをトヤトヤと起おき揚ある折せりしも人ひとあり其醉さい人ひとに打向うちむかひて先刻せんこくの狂乱きやうらんを語かたるも本人ほんじんは素もとが取りも直たださず酒乱しゅうらんと云いふものには五座ござります是れ諸君しよきん豈たと酒乱しゅうらんは即すなはち知らんでは五座ござらぬか衆皆な雷笑してトヤトヤと叫びけり

○小粹せうさいありて大粹たいさい無なきを怪あやむ

凡たゞそ物上ものじやうがあれは下したがあり右みぎがあれは左ひだりがあります故ゆゑに前まへあるものゝ亦また後あとあり東あづまあるものゝ必かならず西にしあり是れ一般いぱん普通ぷつぽうの道理だうりで五座ござります此等こゝろの理窟りくつの今敢いまあやてお手前てまへ様の喋しゃべるを待まちたずして諸君しよきん輩たいの業わざに已いとにも一ひとツお負おまけに既すでに訖しに知しつて識しつて知しり識しり切きつたる事ことで五座ござりませう既すでに然しかり

としますれば世人よじんは何故なにゆゑに此こゝをもて彼かれを推測すいさくすることが出来できませぬか是れは甚たゞだ怪訝きせうの至いたりて五座ござります余あなの今右いまみぎの道理だうりをもて論事ろんじ矩こと申まをすハナト仰おぼやしきことで五座ござるが先まづづ以もつて論事ろんじ矩こに掛かけて見みねばならぬこと五座ござりますするてナ开ひらの亦他事またたがひにても五座ござらぬが世よに小粹せうさいと云いふことがありましてあだめきたるものをや云いふなるが若ごとし小粹せうさいにてすら此こゝの如ごとくあだめきたるものとせば之これをもて推測すいさくするに既に小粹せうさいがあれば亦隨またて中粹ちゆうさいといふものもなければならぬ理窟りくつにて其中粹ちゆうさいは小粹せうさいより一ひと層へいあだめかぬばあらぬ道理だうりでは五座ござらぬか借かけて又既に中粹ちゆうさいがあれば亦從またて大粹たいさいといふものがなければならぬ理窟りくつにて其大粹たいさいは中粹ちゆうさいよりは又更またらに一ひと層へいのあだめきたるものであければならぬ道理だうりでは五座ござらぬか然しかるに世よに小粹せうさいと云いふものは往々むじむじにして聞き及びぬる所で五座ござるが其中粹ちゆうさい大粹たいさいなど云いふものは殆たゞんどあるなく余あなの之これを聞ききたることなきやに覺おぼはます是れは豈たゞと上うへが有りて下したが無なく右みぎが有りて左ひだりが無なきと同一どうい話わでは五座ござらぬかト

ヤ／＼好し去らば嘗て世間になきも論理上の推測に於て到底なければならぬ道理なれば今假に右等の中粹大粹ありとして考へ見ませうに若し果して此等のものがありとしますれば諸君豈と可笑な心地すめるでい五坐らぬか小粹と云ふと何となくおだめけども中粹大粹など申すは何となく不粹にも聞こねまするはハテ可笑なことでは五坐らぬか去れば古昔物語にもおだめきたる假名には交野少將など云ふことが五坐るが若し大將と云ふては何となく不粹にも聞こねます去れば熊八途中にて邂逅し時イヤ大將と云ふことが五坐るが此大將には粹は意味はあらぬもので五坐りませ彼の深草少將小野小町なども亦甚だおだめきて聞こねますれども若し之を深草大將大野大町と申したるならば餘りおだめきもせぬことで五坐りませう又中世より小糸小さんなど小の字の名はありけるが今日も亦藝妓などには往々小の字をもて冠らせたる小金小菊などと云ふやうなるものがありまして如何にもおだめきて聞こねまするけれども未だ大糸大さん

もなければ亦大金大菊も五坐らぬ若し果して之れおとしことならば如何て五座らうか随分共に不粹にも聞こねませう又屋號などにも小松屋の粹なれども若し之を大松屋と云ふは少しく不粹にも聞こねるやうでい五坐らぬか一方の隅に於てヒヤ／＼大ヒヤと云へば又一方の隅に於て否なくヒヤ／＼小ヒヤとぞ呼はりける此の如く小のみありて中のなく大のなきの近頃ナト怪訝も思ふめる所で五坐ります若し又小に對して申あり大あるとしますれば甚だもて不粹にも聞こねるは是れ亦甚だ怪訝のことでは五坐らぬか此等の事は固と如何なる所以に由るもので五坐らうか余の千思萬考其所以を知ることが出来ませぬ唯だ多年習慣の然らしむる所と云ふより外のなきこととて五座る諸君もて如何と爲しまする乎拍手喝采おせろ／＼と満堂を動かしけり

○世に中よ筆と舌程重寶あるものはなし

諸君よ諸君も亦既に知らるしが如く世に口程重寶なるものいなしと云ふ

の話が五座るが成程口は入れたり出したたり二種の用を務めて甚だ重寶あるもので五座る即ち飲食は此口より入りて言語は亦此口より出づるを思へば至て重寶なるものなることを感じます併し余の筆も亦大なる重寶なるものであらうと考へます但し余が舌も甚だ重寶なるものであるが筆も亦至て重寶なる者であると考へたるは右入れたり出したりの重寶で五座らぬ其他の點に於て一種奇怪のことがあれば五座る然らば何のやうなる奇怪のことであるかと云ふに開い別事にてもあらぬが余は去る明治十年鹿兒島戦争の終局を告ぐるの際諸種は新聞を關しましたるに或る一新聞は之を論して云へるの文中鹿兒島の戦争は固と草賊の所爲なるも案外にも之を鎮定するに斯く數月の長きに涉れり云々と記したるものがありましたるに又他の一新聞は之を論するの文中鹿兒島の戦争は固と近世非凡の雄傑西郷隆盛の率ゐる所に於て而かも其手下の士卒の進むを知らずて速くを知らざる慄悍なる鹿兒島壯士の集合にして尙ほ且つ僅々數月に

て斃れたり云々と記したるものを見受けましたるが余の甚だ感ふ數月は何故に長しと感じ又何故に短しと覺はたるや同一數月にして一のもて斯く數月の長きに涉ると云ひ一はもて僅々數月にして斃れたり云ふか頗る怪訝の至りでは五座らぬか(ヒヤ)大ヒヤ)是れ獨り鹿兒島戦争のことに限らず世間日常之れに類すること往々にしてあるの諸君豈と奇怪のことでは五座らぬか余は是に於て筆と云ふものと舌と云ふものは至て重寶なるものなることを感じました(ヒヤ)大ヒヤ)

○角兵衛時計

角兵衛時計とは果して如何なる時計をか云ふものなるかと云ふに這は顛倒なる時計なりと云ふれ意で五座る抑も角兵衛の獅子舞の諸君も亦五座りの如く頭を下にし却て足の方を上にして顛倒には歩行くもので五座りませう是れ今余が顛倒なる時計を名づけて角兵衛時計といふ云へるもので五座りまするてな然らば其角兵衛時計とは何方にかあるものであると云

ふに開の東京に多くあるもので五座るが今之を説くに當り先づ一事のも
 て警へざるべからざることがありす別にてもあらぬが赤鬚奴の假託に
 従者と云へる者は常に主人の後よりてくく〜と従ひ行くものなれども
 橋や川を渡る時には従者が前に立ちて主人は却て後に續くと斯様に申さ
 るゝことが五座るが是れ其危険かりさうなる處に至れば先づ従者を前に
 立て其果して危険や否やを試みさせ愈々安全のところを見届けて而して
 後に主人の進むもので五座りませう夫れと是れとの事は違ひますれど其
 顛倒なるの一事は能くも似たるは今茲に説かんとすなる角兵衛時計のこ
 とで五座るが東京市中の時計の十二時の何に據りて之を定むるものであ
 らうか若し夫れ田舎の時計にありての磁石をもて計り太陽の正南に當る
 を度として十二時を打たしむるものなれども東京に於ては午報を合圖に
 之れに従て其後よりナン〜十二時を打たしむるもので五座りませうが
 其午報は果して何時に之を打つもので五座りませうか或は午前十二時に

之を打つものでありませうか若し果して然りとしますれば東京市中の時
 計の十二時の此午報を合圖として其後に十二時を打たしむるものが多け
 れば是れ既に一分後れたるの道理で五座らぬか況してや此午報なるも
 のは是れ午前十二時に打つので五座らぬもので這は是れ零時零分に打
 つもので五座りませうなれば此午報を合圖に其後より午前十二時の時計
 をナン〜打たしては是れ彼の橋や川を渡る時に従者が先きに立ちて主
 人が却て後に續くと云ふの様に髣髴することでは五座りませう去れば此時計
 は取りも直さず顛倒の角兵衛時計とい申さうするものにては五座らぬか
 何ぞや午前十二時は前にして零時零分の後あるものであらうに其零時零
 分の午報が先きに鳴つて午前十二時の時計が之れに従ふとは豈と亦奇怪
 のことでのありませぬか(ヒヤ〜大ヒヤ〜)

○廣小路の疑ひ

諸君よ諸君も亦既に五存上の如く東京には上野廣小路淺草廣小路若くは

外神田廣小路等の名がありまして小と云ふ字があれは這は定めて小さな路であらうと思ひつ其處に行きて見ますれば豈に圖らんや素的滅法界もあい大なる路ならんとは實は案外千万のことでは五座らぬか(ヒヤ)尤も頭に廣と云ふ字がありて存すれば聊か其道理なきでは五座らぬとも此廣く小さき路と云ふれはいとく合點の行かぬ話で五座る开は亦何故やとあるに今夫れ茲に一人の人あらんに此人は大きく小さな人であるとは申されまますまい去れば此人を評さんには大いとか又は小さいとか但しは大きくもなく小くもなしと云はねばならぬことで五座りませう然るを廣く小々な路と申すの豈に亦奇怪のことでの五座らぬか好し斯く二字重ぬるも亦已むを得ざることにしませうか若し果して然りとしますれば余の之を更めて廣短路と云ふたあらば或の善からんと思ひます其故如何となれば是迄の所謂廣小路なるものは上野にあれ淺草にあれ又の外神田にあれ何れも皆な其道幅は甚だ廣くはあれと其道路の長さの至て短くて二三

町にの過ぎざるもので五座ればなり是れ即ち一種の廣短路では五座らぬか是れ稍々奇怪の名稱のやうなれども彼の廣小路と云へるものゝ其意味を考へ見る時の可笑さに比ぶれば彼れ廣小路こそ奇怪の名稱であつて此の廣短路は敢て奇怪の名稱では五座らぬて諸君もて如何と爲します乎(拍手喝采)

○推理學に挂らざる珍談

宇宙の森羅萬象一として推理學即ち論事矩に挂らざるものなしとは是れ論理學者の云ふ所で五座りまするが余は今此言の我れを誣ひたることを信じます开は亦何故やとありまするに今夫れ人あり偶々私用のありて他家に行くことあらんに其家に一人の小兒ありと假定めますれば其家に到りし人彼の小兒を指さし坊ちやん(或は嬢ちやん)何歳に成られます五歳位ももや成られますかと問はんはに其傍側に父親なり又は母親なり居りて否や、未だ三歳で五座りますと聞いて彼の問ひにし人は愕然一驚を喫し

たるの様にてへー左様で五座りませうかアモア坊ちやん(或は嬬ちやん)の
 おみ大きくいらッしやることよさと呆然て亦言ふ由しもなき様を呈すれ
 ば其れはホソニ其親達の之を聞く耳の如何に嬉しかるらんか心中竊に手
 の舞ひ足の踏む所を知らざるの思ひを爲し莞爾として無量不測の喜悅を
 催はすこととて五座りませう故に此場合に於て若し其之を問ふの人全く右
 に一轉して坊ちやん(或は嬬ちやん)は最早二歳位にもや成られますかど問
 ふことあらば其傍側に聞き居たる親達の果して如何に思ひませうか必ず
 苦笑して否を最う三歳に成りました此院柏小僧(或はお天馬娘)がさア年齢
 ばかり取り込んで藝なし猿猴で五座りませうと云ふて五座りませう此答へ
 を得たる人は氣の毒極りて殆んど穴でも掘りて隠れも爲さん心地こそせ
 らるゝで五座りませう(ヒヤ)偕て是れをもて他を推測りませうに候に
 小兒の年齢を餘分に見て喜ばれ不足に見て稍々怒られたれば這回は其要
 を得たりとて偶々私用のありて他家に行きしに年齢は二八か二九からぬ

最と窺察なる輝焔の在すを見て其親に打向はれアモアお家の嬬様の美
 しき御器量のことよ當年何歳に成られますか或は二十五六にもや成られま
 そかと問はば其親達は娘と共に苦笑し敢て果敢々々敷應答をも得せぬこ
 とで五座りませう(ヒヤ)大ヒヤ然るを二十五六歳の年増を見て貴婦人
 は當年何歳に成られますか或は二十歳位にもや成られますかど問ひ其
 婦人大お打喜ばれ其れでは一杯買はねばなりませぬかナと打笑まるゝこ
 とで五座りませう(ヒヤ)大ヒヤ是れ全く前の小兒の例とは一轉し
 たることとて五座りませう故に此成人に對して其年齢を過分に見て不興を
 得不及に見て酒を買入れたるの例をもて小兒に推及ぼしたならば如何で
 ありませうか即ち前に擧げたる通りで五座りませう此等の事からして一種
 の笑話が五座りませう或る處に一個の痴漢が居りましたが這奴或る成人の
 年齢を過分に見て怒られ若く見一杯買はれたること心に銘じて忘るゝ
 こと能はず何でも人は若く見さへすれば打喜ばるゝものと愚信を或る日

のことでありましたが他に参りましたるに一人の小児が居りまして未だ歩行も出来ず漸く座中を這廻るを見てテモマア此兒の可愛らしさよ定めて幼きこととて五座りませう當年は未だ一歳には成られませう或は零歳で五座りませうか其れとも零歳よりもそつと幼くいらつしやいますかど云ひにしことありと聞き及びましたるが随分笑止のこととて五座りませう(衆皆な碧爾として微笑れつゝ拍手喝采せり)去れば人の年齢を見て其人に喜ぶると否などは小兒の例をもて成人を推測することは出来ず又成人の例をもて小兒を推測することも出来ず殆んど推理學に挂らざる論理の外のもので五座りませうと考へられませう(謹聴々々)然れども其年齢を成けく見るを喜ぶと若く見るを悦ぶとの境界も亦なくて叶はぬもので五座りませう然らば何れの年齢か其境界であるか是れ固より一定の境界もなきことにて漸々と年齢の成けきを喜ぶの情よりして若きを悦ぶの情に移るもので五座りませうなれども今夫れ試みに余の觀察する所をもてすれば十五歳までは

成るべく(年齢)の成けく見らるゝを喜ぶものにして十六歳より以ては成るべく(年齢)の若く見らるゝを悦ぶものであらうと思はれます去れば其十五歳と十六歳の中間が其境界であらうと考へられませう諸君もて如何と考へませう(拍手喝采滿堂を勵しけり)

○背の腹の替へらるゝものゝあることは奇怪なれ

諸君よ諸君も亦既に五存じの如く我邦の俚諺に背に腹は替へられぬと云ふことが五座りませうが成程如何様一方より或る場合に於て見ますれば左様にも思はれませう然し亦或る一方より考へて見れば大に然らざるものあるを信じます(開は亦何んかものが背の腹の替へられるものであると云ふに彼の鳥獸魚肉を喰ふに當り人の好む所の背よして腹は却て人の嫌ふ所で五座りませう是れ能く諸君の五承知のこととて五座りませう是れをもて之と考へて見ますれば世の諺も亦當てならぬものではありませぬ乎(ヒヤ／＼大ヒヤ／＼)

○痴人の立寢言

世間往々痴人ありて言ふことには今の若い者はハチサテ困ツたものだしやないかいな明けても暮れても學問々々と云ひ一家の財政に一向に五頓着ないのい是れまア何うした譯けであらうかいの拙者などの意見をもてすれば敢て學問など云ふ七面倒くさきものい學ばせども世に金が貸しや金さへあれば學者と云ふ奴を雇ひ來て我が奴隷同様自由自在に使ふことが出来てはなにか彼奴等日頃ろい我れころは學者だの識者だの申しても其れはホソコ金の面を見たら意氣持ひなきものにて忽ち日頃ろの氣色何方へやら愚弱々々として此方に靡き來ることは奇珍にも亦憫然果敢の至りである其狀恰も一種の磁石に類して金氣さへ臭したらば忽ちにして其方にやをら頭を擡げ來るものである去れば敢て六ヶ敷理窟を要せず金さへあれば學問せざるも我れ學者を雇ふて吾が私用便利に供せんと嗚呼又嗚呼是れ何者の痴言不實に日中立てる者の一種の寢言にこそあ

んぢれ然れども其痴人の寢言中稍々道理に似たる所あればにや當今の書生たる者天保の半棺人より一本右の魯痴句をもて參らるれば敢て之れに抵抗するの勇氣なく否な其勇氣なきよはあらず唯た其之を反駁するの辨なく平々然として之れに降服するは如何にも智囊の小さき話ならずや乞ふ余今之を論破し呉れんぞ汝天保の半棺人よ能く承りて後來斯る寢言を吐くこと勿れ彼れ天保の半棺人の金さへあれば敢て學問するに及ばず其金をもて學者を雇ふと云ふ魯痴句に従へば亦宜しく左の如く云はざるべからず曰く我れ酒を飲まざるも金さへあれば彼の酒を飲む者を雇ひ來て我れ之を見物せん曰く我れ飯團餅を喰はざるも金さへあれば彼の飯團餅を喰ふ者を雇ひ來て我れ之を見物せん曰く我れ身に襤褸を纏ふとも金さへあれば彼の立派やかなる美服を着たる者を雇ひ來て我れ之を見物せん曰く我れ躬自ら倫敦の繁華巴里の艶美を見ざるも金さへあれば人を雇ふて之れに見物なさしめ歸りて後ち我れ其談話を聞かんと此の如きい彼れ

天保の半楮人の魯痴句より勢ひ出来る所の痴談で五座らぬか(衆皆な重
 笑してヒヤ〜と叫びけり)假令何程金がありたればとて己れ自ら酒を飲
 まざれば敢て其自己の口に美味を感せぬこととて五座りませう又飯團餅も
 然りかし己れ自ら喰はざれば肯て其自己の口に甘さを覺ぬこととて五座
 りませう又衣服も然りかし己れ自ら美服を着ざれば肯て其自己の身に愉
 快は感せぬこととて五座らぬか又倫敦、巴里の見物も然りかし己れ自ら行
 いて見物せざれば敢て其自己に眞の面白味は覺ぬこととて五座らぬか
 嗚呼豈に書いたる餅は腹を満たすこと能はず他人の喰ひし飯は我が腹の
 足しにいならぬこととて實に馬鹿々々敷話なり(ヒヤ〜大ヒヤ〜)去れば
 學問も亦然る道理では五座らぬか假令金がありて學者を雇ふことが出来
 たに致せ己れ自ら之を學びて身に添へたるものでなければ敢て其自己の
 身に眞の趣味はあきものにて又其眞の便益もなきもので五座りませう(謹
 聴々々)然るを世間には随分共に痴人も多く斯る寢言を吐き散らし悟とし

て悟る所なく又之を聞く書生も一言一句の抗論もなり難く平降するとは
 抑も何事ぞ余は殆んど憫笑に堪へられぬことと思ふめるなり(拍手喝采器
 々として満堂を動かしけり)

○英國に情態は猶ほ淺草に觀音のごとし

上野の狸蔵に云へることが五座りませう江戸が見たけりや高崎田町と是れ
 其高崎の田町は豪商軒を並べて商店を開ける有様宛然江戸の市街に似た
 りと云ふ所よりして云へるもので五座る去れば上野片隅の老婆などが此
 世に生れ出でたる甲斐には何ふか花のお江戸を一目だに見まほし然し若
 し金と場合の悪しくて江戸見物の出来ざるものならば責めてものこと江
 戸が見たけりや高崎田町と云ふからに其高崎の田町とやらんでも見て江
 戸見物に代へなんものをと之を見物する者多かりしとなん是れ瀛車なき
 以前の物語り今せやお江戸も東京と改まり箭の如く鐵砲の如く又飛ぶ鳥
 の如く最も迅速なる陸蒸氣の開通したれば上野より上野まで一日にして

往復すること恰も一ツ處より出で一ツ處に着するの間断なきが如くで五座ります(ヒヤ) 閑話休題まして斯様に江戸が見たけりや高崎田町を見て江戸見物に代へる等随分共に輕便のことで五座るが儘て此理をもて考へますれば英國が見たけりや淺草の觀音を見たならば其れ或は英國見物に代へられることが出来ませう开は亦何故ぞとありまするに英國の情態の譬へハ猶ほ淺草の觀音のごときもので五座れば共同の様なる處を見たらば其實物は見ぬとも或ハ其大略を推測ることが出来ませうと考へます然らば何故に英國の情態は淺草の觀音に似て居るか云ふに諸君試みに思はれよ淺草の觀音の其實體は最も小にして總かに一寸八分の小體で五座りませう去れを其身體に纏ふ所の堂は十有八間四面にして且つ仁王の如き巨人を門番と爲し居るで五座りませう英國も亦然るもので其本國は遠く歐洲大陸の北海に離れたる一小孤島で五座るが之れに附屬する所の殖民地は頗る宏大にして且つ海軍の強猛なるものゝあることの恰も

仁王の門番するに類するものがあるでは五座らぬか又英國の繁昌は淺草觀音の繁榮に比べて似たる所があるは豈に亦奇きことにてはありませぬか何に致せ右に比較する所をもて考へて見ますれば英國の情態は恰も能く淺草の觀音に似て居ることが知られませう去れば遠く遙々英國見物に行かずとも近く淺草の觀音を見物すれば大略英國の情態を知ることが得まするは豈に亦輕便のことてハ五座らぬか(ヒヤ)

○天下の英雄君と吾とのみ

世の中に英雄を拂底なるものいあし余は昨今五苦勞欄にも亦物好きにも鐘太鼓を鳴らして青表紙の片隅より英雄の探索と出掛けましたがハテサテ拂底なるものは英雄なる哉實に皿大の眼を活と見開き虚勞付眼に彼方此方と見廻しヤットのことにて總かに數名の英雄を見付け出しました是れとても多くは自稱と云ふ冠詞の付きたる英雄なれば當てあらぬ英雄殿にのあれども折角余の勉強と刻苦とをもて尋ね出したるものなれば乞

ふ一笑の爲め試みに之を擧示しませう扱おるに古昔漢土は後漢の末に魏の曹操が新野の玄德と青梅に酒を煮て互に酬しつ指されつ酌み爲替し馳て予時も移りて半酣機嫌に爲るや漸々當世の英雄を論じ始め曹操の玄德に打向ひ當世の英雄は果して誰れあるや試みに之れを指名あられよとありけるに玄德の辭退して之を知らずと云ふを曹操は押返し強ひて求めて止まざれば玄德も亦已むことを得ず成るべく的頭の大ささうなる武將より順次に指名したるに曹操は微笑つゝ否な未だし否な未だしと一々之を打消しけるに予遂に玄德の云へるやう是れより外に某が知りたる人の英雄と覺しき者候はず是に於て曹操が云へるに夫れ英雄の胸に大なる志を懷き腹に良計を隠して宇宙を包攬するの機天地を吞吐するの志あり玄德の曰く今誰か能く此の如き者ならんとありしに曹操手をもて玄德を指さし又自ら己れを指さして言葉すしく云ひけるは今天下の英雄は唯だ御逸と我れと二人あるのみと其言未だ了らざるに大雨風と降り來りおど

ろくしう雷鳴りひらめきけるに予玄德の色を失し戰慄とわななかれて手に持ちたる箸を思のぞき取りと取落しけるが是れも亦曹操を謀る當座の一計ありとは後に予斯くと知られける是れ即ち余が探索し當てたる第一なる二人の英雄で五座ります(古い)這の古くとも後に新たらしき英雄を出してお耳に達します程に義時御耐忍を乞ひまする偕て其次ぎに扣へたる二人の英雄は昔日豊臣秀吉の北條征討の爲め遙々上國を出陣して關東に在るや古へ名残の名所鎌倉に遊びました此處の源頼朝の覇府を据ゑたる所にしも五座れば其頼朝の塑像がありましたれば秀吉は之を見せばやと馳て予其塑像のある處に到りつ進んで其塑像の背を撫でつゝも云へるやう君は我が友なり徒手で天下を取る者唯だ吾れと君とあるのみ然かひあれども君の名族を承継きたる者にして吾が人奴より起りたるには如かじ吾れ遂に地を畧して明に至らんと欲す斯くて尙ほも餘命あらば滿州蒙古、韃里、印度、西藏、緬甸、暹羅、安南等の隣國は申すにしも及ばず地

上何ぞ吾れを妨碍る喜馬拉山あらんや馬蹄に蒐けて之を踏崩し益々進んで歐洲列國をも横行し遂に宇内全世界を席卷併呑し既にして地盡れば大地を堀り穿ちて地獄に攻入り一百三十六地獄を擊破蹂躪し閻魔大王を擒獲にし牛頭馬頭の鬼奴は一聯の珠數に縊付け引きもて來りて吾が馬の轡奴にせんずとの大言壯語を吐ちたるは是れ即ち余の尋ね出したる第二の二人の英雄で五座る(又古ひく)是れよりは眞に新たらしき英雄をお耳に達します諸君の知るや知らざるや昨今我日本の文學社會に獨尊子となん呼ばれたる一個の人ありまするが此人の自ら固く信じて疑はざるは天下に有りど在らゆる億兆の人の中最も尊き者の自己様唯だ獨りであるを斯様に深く思つて居ることださうで五座るが此獨尊子曾て鏡に打對ひ自己の姿を寫しましたるに其堂々たる有様は得も云はれぬ計りにて其風采愛すべく霎時は立ちも去り離れてありけるが總て予獨り局々て微笑つゝ云へるやう天下の英雄の吾れと君とのみと其言了りて別れを惜みつゝ立

ち去れりどなん是れ余の近來發見したる第三なる二人の英雄で五座る(ヒヤ)諸君よ豈と右の二人の英雄の新たらしきもれでは五座らぬか諸君の亦五存じなるや否や蓋世子となん呼ばれたる素的滅法界もなき大きな名を昨今改めて思海子と名乗れる人の常に自ら古の孫武吳起に比し甚だ好んで兵法を談じ頗る狂して戰爭を論じまするが嘗て英將空林登は彼の華德路の役に於て拿破崙一世と咫尺の近きに接したるに砲煙硝霧の爲めに掩蔽れて英雄同士の面を會せざりしを頗る遺憾と思ひにしと聞き及びぬが今夫れ此思海子は亦聊か空林登と其感と同じくする所のものありて存せりとして彼れ自ら云へることには非立、歷山より查列曼に至るまで五百有餘歳綱標、愷撤の若き則ち見て之を知り查列曼の若き則ち聞て之を知る查列曼より成吉思汗に至るまで五百有餘歳繼馬東西兩帝の若きは則ち見て之を知り成吉思汗は若きは則ち聞て之を知る成吉思汗より拿破崙に至るまで五百有餘歳帖木兒、忽必烈は若きは則ち見て之を知り拿破崙の若

きは則ち聞て之を知る拿破崙より而來今に至るまで五十有餘歳英雄の世を去る此の若く其れ遠からば英雄の居を去る稍々遠きものゝ若しと雖ども瀛車瀛船電信郵便を以て世界の方面を狭縮めたる文明の盛運に及び英雄の居に近き此の若く其れ甚だし然り而して爾る有る無ければ則ち亦爾る有る無き乎余輩遂に拿破崙と世を同じくして俱に兵道を談論せざりしは甚だ遺憾の至りなりと其後思海子或日のことなり偶々市中を散步して眞屋の店頭に遊びましたるに折節其傍側に拿破崙の寫像のありけるを見てやをら手を伸しつ其背を撫てつゝありけるが聽て左手をもて拿破崙を指さし又自ら右手をもて我れを指さして曰く天下の英雄唯だ君と我れと有るのみと申されましたるに其言未だ竟らざるに轟然しき迅雷の震怒に驚かされて愕然として覺め來れば是れなん空想過ぎにし南柯の一夢にてありけるとか聞き及びましたるが是れ余が探索し當てたる第四ある二人の英雄で五座る此れ如く古今列國腕力社會に於て纔かに二人ヲ四組都

合八人の英雄を得ましたるが是れをもても實に英雄と云ふ者ハ至て拂底なることが知られます然らば其八人は眞個の英雄であるか是れ多くの自稱英雄で五座りますれば亦當てにはならぬものであります然し古し加藤清正が保侶騎二十人を撰ばんと欲し部下の將士をして其用ゐるに堪ゆべき者を擧げしめましたるに坂川某なる者あり自ら我れこゝは能く其任に堪ゆる者なれとて我れ自ら己れを推薦ましたるに予清正を始め老臣等皆なひたと呆然に呆然て怪み訝り疑ひつゝも坂川に打向ひつ其意を問ひましたるに坂川の答へに臣が父ハ君の爲めに銃を執り堅を搦き善く戦はざるものには候はず去りながら臣が身は父にあらねば其果して保侶騎に堪ゆるや否や定だかに臆る由も候はず人を知るの難き父子尙ほ且つ然り況してや他人をや何にとて輕々しく他人を推薦することを得ませうや然るに我身の如き我れ多年親しく之を知る熟信の厚きは是れ臣が自ら己れを推薦する所以なりと云はれけるが其言從容として其色自若と致して居りましたれ

は清正も大に歎稱しなして之を用ゐたりとか聞き及びました此等をもて考へて見ますれば自稱英雄は却て眞は英雄かも知れんこととて五座る然らば昨今の如き請ふ腕より始めよと云ふ者の夥しき世の中には定めて英雄の多きこととて五座らう譯合だか是れナト覺支なきこととて五座るてナ(拍手喝采)

○虎列刺病より尙ほ一層恐怖るべきものあり

諸君よ諸君も亦既に五承知の如く苛政は猛虎より恐ろしと云ふことが五座るが今夫れ其虎に縁故ある虎の烈しく刺すと云ふなる虎列刺病より尙ほ一層恐怖るべきものが五座ります抑も虎列刺病の性たる頗る慄悍鳥惡にして物の比較公べきものなきの復た敢て疑ふべくも五座らぬこととてある去ればこそ彼の西郷隆盛の如きは世に其れ英雄よ其れ豪傑よと其名の甚だ高くありて彼の明治十年西南の大乱を起しガチンリ數月の久しき間守戈を交へて戦ひしものゝ畢竟する所敵を味方の戦死者を合算して僅々

二三萬人に過ぎぬこととて五座る然るに一たび此の虎列刺將軍の來襲を蒙るに於ては忽ちにして十萬前後の死人を見ること屢々にして敢て珍らしからぬこととて五座りませう是れ豈と虎列刺は天下の最も恐怖るべきものでは五座らぬか然し余をもて見れば虎列刺の恐怖るべきは小なるものにして是れよと尙ほ一層恐怖るべきものゝ五座ることと信じます开(果して如何なるものにて五座らうか或は蛇蝎なる欺將た豺狼なる欺否)其様なるものでは五座らぬ然らば如何なるものか虎列刺より尙ほ一層恐怖るべきものとなすか即ち吾人々類の中虎列刺病製造の父母とも謂ふべき不養生千萬何でも五散とヘクク口に浚ひ込む所の人にて五座るが是れ豈と虎列刺の親分とも謂つべきものでは五座らぬか此人や面を見れば敢て恐る怖ろしき様子もなければ其心の恐怖るべきは格別のものにて鬼と蛇を合するも恐らくは是れには及ばじと思ひます是れを具に天下最大一の恐怖るべきもので五座るてナ(謹聽々々)

○婦女子の喋舌せざるは果して何きの時なる乎

何方も同じ人情なる哉人情に二ツはなし昨日饒舌の婦女子の今日も亦多言にして今日多口の婦女子の明日も亦輕口ならん又我が日本の婦女子のみ饒舌なりにしと思ひしに何方も變らぬ空の下に住へる婦女子は遠く海山隔てにし佛國西の婦女子も亦多言ならんとは是に始めて知りぬ婦女子は此方も同一轍なる輕口のものなるを數十年前佛國に於て拿破崙一世の時女官數名宮中にて彼人の小粹なれど玉に疵なるは斯くくの癖あり此人の甚だ不男なれども如何なる處へ得も云ひぬ艶色であるなと頻に習々雜談に取離子て居る所へ運には惡しかれ拿破崙來りけるに予皆々愕然として大に打驚かれ興冷め面にて遽に談話を止め心中竊にお叱咤をもや蒙らんと咄み居けるに鬼をも欺く拿破崙も莞爾として微笑つゝ云へるやう汝輩は姦しき今に始めぬことながら能くも亦斯くの饒舌れるものなる哉朕殆んど感服せり就ては一事の問ひたきことこそあれ今は別事にもあ

らぬが汝輩一年の中何れの時か稍々謹慎の状を表し言葉少なの時なるか乞ふ皆々答へて見やれよとありければ皆々な叱咤をも蒙らんかと思惟しに案に相違して此爲體あれば餘りの意外さに又更らに一驚を喫し其言葉少なきは或は憂苦の時なりと云ひ或は貴紳の在す時なりと云ひ種々様々思ひ想ひの存念をもて對へけるに拿破崙は頭を打振り否や／＼左にあらす汝輩の言ふ所一も當らず抑も汝輩の輕口なる何とて其場所因るものぞや唯だ其言葉少なきの毎年二月にてもやあるべき耶夫れ二月は二十八日或は長くて二十九日なれば假令如何に多言するとも其日數に止まりて其餘の日に由でざれば他の月と比較れば必ず二三日分丈けは言葉少なき割合なり故に二月を措いて汝輩の言葉少なき時はあることなしと云ひければ坐中一同雷笑して止まず遂に復た此笑状を彼是取沙汰するの饒舌に終りしとなん聞き及びましたが是れをもて見ますれば何方も亦同じ人情にて婦女子の饒舌は天下一般普通のことであると見ねました乘皆を莞爾

としてヒヤ／＼と叫びけり然かし余の觀察する所をもてしますれば月を
 もて見ず時をもて見て婦女子の稍々言葉少なの時が一ツあらうと考へま
 す开は如何なる時にてあるかと云ふに造化の此婦女子の爲めに情なの所
 爲たるは物を言ふ口と物を食する口とを別に造らざ之を兩用兼體に作り
 たるは彼等婦女子に於ての無かし造化に對して怨みあることとて五座りま
 せう(ヒヤ／＼)若し夫れ此物を言ふ口と物を食する口と別にて二個ありた
 らんには一口に於てはムニヤ／＼と痕口を開て物を食すると同時に一口
 に於ての糸口切らざ饒舌仕りたることにてありしならんに之を兩用兼體
 に作られたれば薩摩芋や唐茄子を食する時は己むを得ず稍々黙すること
 て五座ります故に余の觀察する所をもてしますれば口に食物のある時の
 み洗石蘇秦張儀をも厭する婦女子も雲時が程は無口の徳を守らるゝや
 うに見受けられます(ヒヤ／＼)大ヒヤ／＼去りながら此固と饒舌なる婦女
 子の其物を喰ふ時と雖ども眞に無言なること到底能はざる所にして其

物を喰ふ間にも随分物も言ひますするが其言葉は固より定だかに聞はざる
 ことなれば今之を諸君に御披露することもなり難く已むを得ず其形容を
 爲してお目に掛け申すべきなれども是れとても容易き業にてはなく到底
 世出来得べからざることで五座るが乞ふ試みに之れが形容を爲さばム
 ニヤ／＼夫のお松さんお竹さんムニヤ／＼今度の福助の身振の
 ムニヤ／＼善いことがア云々とても申しませうか(衆皆な雷笑して
 拍手喝采せり余は人の饒舌のことを演べませうと思ひまして覺へず夫子
 自ら長談の多言仕りました豈に辨を好まんや余已むを得ざればあり(衆
 皆な半身を躍らしてヒヤ／＼と叫びけり)

○向島の琴問團子の繁昌をる所以

諸君よ諸君も亦既に五存七の如く花の向島は長命寺の傍側長堤の曲折た
 る處に其名も高く昔に聞へし琴問の團子のあることで五座りませう上戸
 の法來知らず我々下戸連の春暖く三四月の氣候になり上野飛鳥の山は笑

ひ隅田の流れは清元と歌ふや尻も家に落付ぞ人魂の如く飄然として出づ
 るや四方の氣色俄然と打變り何となく心に爽快とするの思ひあり覺ゆ
 先きなる人よ誘導れて墨陀に遊び錦の如き櫻花を打眺めつゝ白鬚梅若の
 近邊まで行き懸て予歸路に就くや其歸途多くは琴問團子に立寄りまして
 茲に團子を喰ふて我家に歸れば八百松にても一杯やらかして來りし形容
 をするので五座る去れば此琴問團子の繁昌するも亦無理ならぬことで五
 座るが余の考へにては其他に琴問團子の繁昌する所以のものがありて存
 することを知りまする开は亦何故ぞとあるに俚諺に申さるゝでは五座ら
 ぬか花より團子と是れ花見に行きにし人々が櫻花よりは寧ろ琴問の團子
 こそ愛しならめと思ひつ此琴問團子の見世へドンドコくと舞込む所以
 では五座らぬか(ヒヤ〜大ヒヤ)

○天下最第一の雄辨者ハ金あり

諸君よ諸君は天下最第一の雄辨者の果して何者であらうと考へますか其

れ或は雅典の大摩斯塞尼士羅馬の西塞路と思ひますか又は漢土戰國の蘇
 秦張儀と察しますか但しは我邦井戸端會議の辨士お松さんお竹さんであ
 ると信じますか然かし此等の人は辨士は即ち辨士には相違五座らぬとも
 是れ皆な未だ天下最第一の雄辨者とは申されぬことで五座る然らば何者
 か此天下最第一の雄辨者の位置を占むべきもので五座らうか余の考へを
 もてすれば金こそ其天下最第一の雄辨者なりと信じます开は亦何故ぞと
 あるに今夫れ茲に一事の辨舌を要することが五座りまして此方の連中よ
 り最も雄辨の聞は高き者を撰出して之を説客たらしめ彼方に遣はして説
 かしむることあるも容易くは彼れをして我が意に應せしむることの出來
 ぬ業で五座る是に於て平彼の辨士も亦殆く困じ果て這は我が辨舌には行
 かすと匙を投げ出して閉口するに當り辨士の任に代へて金辨士となん呼
 れたる一個の辨士を遣はして遊説せしめば敢て喋々の辨舌を費すことも
 なく黙々の間に無量の陰説を爲し忽ちにして彼れ剛復の人をして我が意

に廉かすることを得べし是れ敢て珍らしからぬ事實で五座りまして吾人の屢々聞見する所であります去れば此金辨士は彼の蘇秦張儀にも優る天下最第一の雄辨者で五座らうて十兼皆な莞爾として微笑れつゝもヒヤ／＼と叫びける故に余の茲に一言金玉の要を示します日く金口なくして言を發す金の一言の口の百言に優ると(謹聴々々)

○西洋人數字の爭論

昔者羅馬に一の神祠が五座りましたが其祠前に寶金をもて作られたる紀功牌を掲げましたるに偶々二人の騎兵の五坐りまして此處に來り過ぎましたが其東の方より來りし者の其紀功牌を指さして云へるやう是れ白銀であるど其西の方より來りし者の云へるに否な黃金であるど遂に忿争して馬上に相搏ち氣絶して地に墜るに至りました然るに何んぞ知らん其紀功牌は其表面を黃金にして其裏面を白銀にせしものならんとは豈に亦馬鹿々々敷次第にあらざや是れ有名なる話にて互に一方を偏見して事物

の道理を論ふる者に譬へるものにて五座るが兎角に西洋にても一方の利害のみを見て一方の得失を見ざることは随分有り勝ちなることと察せられませに或る赤鬚奴の日頃怠慢たる報いにて家政火の車と爲り如何ともすべからざるより證書を入れて他人より九弗の借財を致し漸く當座の息を繼ぎたるは善けれども固より返す當てもなく其後とても相變ら老懶惰に打過ぎぬる程み足下より飛鳥の立つが如く早や返濟の期日が來りましたれば邊のここの如く大に打驚かれたれども流石は此道には多年の経験を積重ねたることなれば轟く胸を左らぬ體に打どほけつありける所へ來りしは例の高利貸し先生にて前日の貸金今日既に期日にもあれば去來受取りに参りたりと云へば負債主は左様で五座りましたかへね开はトント打忘れまして甚だ申譯なき次第去りあがら縦か六弗計りなれば孰れ近日返金しまする程に今霎時御猶豫ありたしと云ふにぞ債主は怪訝りつゝも否やな待ち下され只今六弗と申されましたが前日の貸金は證書に

ある如く慥かよ九弗でありますが夫れはお間違の言葉では五座りませぬか負債主曰く否な決して間違にては五座らぬ債主曰く开は御身としたことか論より證據是れ此の證書が物を言ふ慥かに九弗と書いてある能く御覽うじやれと彼の證書を披きて差出すに予負債主も之を見て夫れ見たが宜しい我が手づから書いたる此證書に確と六弗と書いてあるのではないか否な現に九弗と記してあるではないか否々面り見らるゝが如く六弗と書いてあるではないかと論争ふて止まざるにぞ隣家の人這の何事やらんと飛び來りて見れば 手割……6……負債主 書くの如くの論争にてありけるどなん呵々(聴衆皆な九々と笑ふて拍手喝采せり)

○右様と左様とは果して同一あるにや

余は右と左とは判然別事で五座らうと思ひまゝたるに多年人の書翰を見るに右と左とは敢て異なることなく殆んど同一事の如く見做れてあるかと思受けられます諸君も亦た既に五座りませうが人の書翰を

認むるに先づ始めに一事の要件を書いて後に右様御領承被下度候云々と記する者もあり或は左様御承知被下度候云々と認むるもありて其右様と左様との殆んど同一にして敢て區別する所は五座らぬやに見受けられますが是れ果して如何ある道理に基くもので五座りませうか余には殆んど解し難ぬる奇怪の一事で五座る(衆皆お莞爾として微笑つゝもヒヤ〜と叫びけり)然かし余の考へをもてしますれば此の如き場合に於ては右様と書くをもて宜しとし左様と記するは甚だ宜しからぬことと思ひます开は亦何故ぞとありまするに右とは前と云ふに同じくして左との後と云ふに均しければ此等の場合に於ては是非とも右様と認めねばならぬことで五座りませう其証左には様の字を離して單に右と左と書く時には前より記し來りし所を承くるには左の如し左の通りなどゝ云はれぬことで五座りませう其勢ひ必ず右の如しとか右の通りとか承けて云はねばならぬことで五座る其後に記載することを豫め前に指さし置く時にこそ左の如し左の

通りおと書くべきことおれ是れをもて之を見ますれば前記を承け云ふに
は必ず右様と云ふべくして左様とは云われぬことにて五座る諸君はもて
如何と考へなしますか(ヒヤ) 左様々々五尤然り(ヒヤ)

○新聞紙社説欄の疑ひ

世の中には随分共に疑はしきこと多かることなるが新聞紙の社説欄こそ
最も疑はしきものなれ并は亦何故とあるに判然社説若くは論説を命名す
るもの敢て疑はしきこともなければ彼の東京日々新聞にして一葉を
翻へせば殊更らに東京日々新聞と題したる欄名あり又讀賣新聞にして同
じく殊更らに讀賣新聞と云ふ欄内あり此等の類比々皆な然るものにして
敢て珍らしからぬことぞ五座るが東京日々新聞と云へる一種の新聞に於
て紙中殊更らに東京日々新聞と題したる欄名ありては其他は東京日々新
聞にてのちく別の物であると云ふ伏意を含み居ることぞ五座りませう是
れ論事矩に掛けて見れば掩蔽べからざるもので五座る(ヒヤ) 大ヒヤ

是れをしも疑はずんば天下亦疑ふべきもの候はんや實に疑はしき
怪しく訝しきことでは五坐らぬか余の新聞紙てふものは世の疑ひ人の感
ひなとも能く氷解して呉れるものなるかと思ひましたるに却て自家が
我々をして疑惑せしむるとは豈に亦案外千萬のこといもでは五坐らぬか
(拍手喝采露然たり)

○人の年齢よ就て一種の變状

諸君よ諸君は左思ふや否や人の年齢は新曆で算して若く舊曆で數へて長
けくあるの常のことにして斯く思ふも亦平生のことぞ五座りませう左も
ころわらん秋冬の頃生れし人の春夏の時にありて算して二十歳の者は
之を新曆にて數ふれば十八歳何ヶ月と爲り茲に殆んど二年程の若がへり
が五座ります左なくとも多くの一年は若がへり左らずも同年に止まる者
あるは殆んど稀れあることぞ五座ります然るに茲に一ツの變状がありて
舊曆に算して若く新曆に數へて却て長けくなる者が五座りまするて諸

君試みに思へよ茲に明治元年一月生れの人あらんに此人の年齢を明治廿二年の一月に於て新曆にて算すれば則ち二十一歳一ヶ月で五座りませう然るに之を舊曆に數ふれば未だ年取りをせざれば二十一歳でありまして二十二歳とは成らぬことで五座りませう去れば舊曆で二十一歳の者が新曆で二十一歳一ヶ月なれば其一ヶ月丈けは新曆の方が長けくある道理で五座りませう是れ豈と奇妙な話では五座らぬか(ヒヤ)然れども是れ未だ奇妙の尙ほ小なるものである其奇妙の大なるものに至りましては右の人を二月の一日に在て新曆より之を算すれば其人の年齢二十一歳二ヶ月で五座りまするに舊曆をもて之を數ふれば常の例なる二日三日の年取り來らざる前なれば尙ほ二十一歳にして未だ二十二歳とは爲らぬことで五座りませう此場合に於ては此人や新曆で算すれば舊曆で數ふるよりの二ヶ月の月長けて五座りませう豈に亦奇妙なることで五座らぬか(ヒヤ)大ヒヤ然れども纒に一日を経過すれば舊曆の方の俄然一足飛びに躍進に

て忽ち二十二歳といなられまするに新曆の方に於ては尙ほ二十一歳二ヶ月にして未だ二十一歳三ヶ月にも成らず遅々として宛然牛歩に均しきことで五座りまする(ヒヤ)去れば此場合に於ては十一月二十八九日は一歳を成さずして一日の却て一歳を成すものなるにや殆んど怪訝の至りである古昔瑣克刺底の門人に墨俄里格と云へる者がありましただが種々なる迷案を立てし人を眩惑せしむることが五座りました其迷案の一をソリチ「ス」名づけましたが是れ即ち物の累積を意味しましたるもので五座る今茲に麥粉一合許り有り人に問ふて曰く是れ麥粉一升なりや答ふる者の曰く否な三合許り有り是れ一升なりや曰く未だし九合九勺許り有り曰く未だし更らに一勺を加へて問ふ是れ一升なりや曰く然り果して然らば九合九勺は一升を成すこと能はして却て一勺は一升を成すにやと斯様な問答を設けられましたが今夫れ此舊曆の年齢に於ては十一ヶ月二十八九日に一年を成さずして却て一日は一年を成すに類するものあるは殆ん

墨俄里格の迷案に似たるものが五坐りまする去れば今日にして墨俄里格が我邦に居りたらんに此新舊年齢の相違も亦其迷案の一に設置れたることで五坐りませうなんにしても這は亦奇妙なことで五坐らぬか衆皆き動搖してヒヤ〜と唱へけり

○蘇秦張儀眞の辨士にあらず

天下辨舌と云へば一も二もなく蘇秦張儀と云ふ中に於て余獨り今此の如く蘇秦張儀は眞の辨士には非らざと斯様に申しましたらば諸君の其れ或の次に打驚かるゝことで五坐りませうが其れ之れ此の如き世を驚かすは題案を掲げ來る所以の者は抑も亦其説ありて存するまで五坐ります然らば其説どの如何すと云ふに別にても五座らぬが凡そ辨士の辨士たる所以のものは強ち敢てペチヤンチヤ饒舌する計りが能でもあからうと考へます若し夫れ唯だ何でも間斷なくペチヤンチヤ饒舌するをもて辨士としまさるなれば彼の落語家や軍談師若くは井戸端會議のお松さんお竹さん等

の如きの最も雄能の辨士と謂はねばならぬことで五座るが天下寧ろ此の如き道理のなからうと思ひます畢竟する所此等の人は偽の辨士にして眞の辨士での五座らぬて然らば如何ある之を眞の辨士と云ふか抑も眞の辨士なる者は或時のもてペラ〜饒舌すること恰も燕の一番子の如く又鶴の如くなるべきもまた或時はもて黙々無言なること宛然啞子の如く土偶木像の如くなるべきものなればならぬことで五座ります之を要するに臨機應變其相對する人の氣象性質と時機と場合とに應じて變化しつゝ測知るべからざるの辨舌を爲すものをこゝ眞の辨士といふなれば彼の蘇秦張儀の果して能く此の如くなることを得ませうやチト覺支なきことで五座る余の聞く所をもてそれは蘇秦張儀は死版に彫りたるが如き同一か定りの文句を終身事とし甲に遭ひても同一事を辨じ又乙に遇ひても同一事を説き同一文句を繰返々々十百回饒舌を極めたる者にして是れ一種の落語家軍談師にして眞の辨士とは大に其種類を異にしまするもので五座る

てな然らば何をもちて蘇秦張儀の辨舌は明けても暮れても同一事なりと云ふか諸君試みに彼の蘇秦張儀の伎倆の程を記載したる戰國策か史記を繕きてお覽じやれ何れの國王に遊説するも常に同一句調お例りの文句にて貴國は天下の疆國にして王の天下の賢王なり東に何あり西に何あり南に何あり北に何あり地方幾千里帶甲幾十萬車幾千乘騎幾千萬粟幾年を支ふ此れ霸王の資なり夫れ大國の疆と王の賢さをもてす天下能く當ることなし然るを今乃ち何面して何國に事へんと欲す臣竊かに大王の爲めに之を差す故に願くは大王早く之を熟計せよ大王誠に能く臣に聽かば臣請ふ何々を務めんと順次に明けても暮れても同一文句をもて遊説して歩行しは如何にも簡單の說客では五座らぬか(ヒヤ)大(ヒヤ)去れば始の一回は耳新らしく之を聞けども二回目よりは稍々陳腐の思ひを爲し其三四回と爲るに及びましては其辨説を聞かぬに先も又例の東に何あり西に何あり南に何あり北に何あり地方幾千里帶甲幾十萬車幾千乘騎幾千萬

粟幾年を支ふと云ふのかと思ひつゝも見れば果せる諛例の文句あり豈に亦馬鹿々々數次第にあらせや諸君も亦定めし戰國策史記を見たる時の此思ひをしたること五座りませう(然り)此の如く誰が見ても先きの透通りて見ゆる辨舌の餘り感心したることにしも五座らぬ然るを此の如き死版に雕りつけたるが如き遊説に感服して其意を從ひし當時の國王は果して如何なる者で五座りましたか今にして之を思へば其馬鹿らしさは腹立たしき程果然れたること五座りまするてナ諸君よ豈と彼の蘇秦張儀よりは余の方が餘程上級の辨士で五座らぬか(衆皆な顛倒かへりてヒヤ)と怒鳴りけり

○國會議員は果して世人の思惟するが如き高尚の人物なる乎

世人は國會議員は果して如何なる者と思へるか余の常に聞く所をもてすれば世人は國會議員と云へる者は鬼神の如く最も貴い人であると深く心中に銘じて感拜するものゝ如く信せられますが國會議員と云ふ者は果し

て此の如き價値のあるもので五座りませうか勿論一國の代議士のごとに
 しもあれば其擔任の固より貴重なるに相違五座らぬが其才能學識の果
 して世人の思惟せるが如き高尚のものでありませうか這はナト覺支なき
 ことで五座りませうかは亦何故かとあるに何時の世とても眞に高尚なる才
 能學識ある人物はさう外にて量り筭にて算する程の夥しくあらんや實に
 寥寥辰星の如くあるもので五座る然るに彼の國會議員なる者は外にて量
 り筭にて算する程あるもので五座りませうか今余が斯く申さば諸君は定めて
 大に喫驚することとて五座りませうが是れ決して喫驚することでの五座ら
 ぬ全くの事實なることで五座る諸君試みに思へよ國會議員なる者は十二
 三万の住民ある地方には必ず一人は出づる者なれば茲に三千八九百万の
 人口を有したる一國ありとせば此國には必き三百人前後の議員を出すも
 ので五座りませう又此三百人とても後に掛替のなき三百人にもあらで三
 四年の後は全く新陳交代し盡すものなり去らずも時々前任議員にして事

故ありて辭職等することありて更らに他人を撰擧してもて其缺を補ふ
 ことあれば先づ々々もて三年の後は彼の三百人の議員の悉皆新面と爲る
 ことなるべければ十年の間には凡う一千人程なる人で五座る又去るのみ
 ならず一千人既に議員と爲る者あれば其他に稍々同等の資格ある者にし
 て其志を得ずして空く浮き兎烏を送る者數千人あるを知るべからず故に
 此等の者を詳細に算する時には十年間に國會議員に相應したる人物の一
 萬には下らざることとて五座りませう去れば人生の五十年間に五萬前後
 の多きあり之を一世紀即ち一百年間にして見れば必ず十萬前後の夥しき
 數あるものであれば之を一千年の間に見れば則ち無慮一百万前後の夥多
 ありて殆んど外にても量り難く筭にて算し盡せぬ程あるは豈に亦廣大
 無邊の至りては五座らぬか衆皆な雷笑してヒヤ／＼と叫びけるが稀れに
 はノ／＼と唱へる者も此處彼處に聞えたり之を彼の孔孟老莊若くは瑣

克刺底弗拉的亞里斯多德或は倍根度加多來布尼韓圖歌傑爾彌爾斯邊撒の

千歳稀有に輩出する大思想家に見れば萬をもて縦に一に當るに過ぎず且つ夫れ此等の學士は皆な一國一地方に輩出したるものにあらず廣く滿天下に輩出したるものなり然るに尙ほ且つ其大思想家と名づくべき者を求むれば僅々指を屈する程の少數なり故に彼の三千八九百萬の人口を有する一國にして一千年間には國會議員とも爲り得べき者一百万人ありとせば若し之を廣く全世界列國の間に就て見れば僅々十年の間にも尙ほ且つ一百万前後の人はあらん況してや百千年の長さ兎烏をもて之を見るに於てをや無慮幾億萬の夥多あるべきや鼠筭をもて當らざれば殆んど知り得べからざる程あり此の如く澤山に有り餘る國會議員を世に復たど無きものゝ如く思ひ做すの抑も如何なる所以に基けるものなるか余は殆んど其所以を探求むるに困難なき能はず此の如く舛も筭も及び難き程夥多ある人が果して高尚の才能學識ある者で五座りませうか余は之を知らず唯た其れ嘗て期邊撤の代議政體論に於て之を聞けることを記憶し又之を實際

に照して其寸分も違はざることを信するのみ諸君はもて如何と信じます乎(聽衆皆な熱心に拍手喝采するうちにも言語の刺戟餘劔より甚だしと叫ぶ者ありけり)

○閻魔の顔も三度

諸君も御承知の如く世に佛の顔も三度と云へる俚諺が五座るが是れ佛と申す者の至て勘忍の強きものにして人が罵詈も容易くの忿怒らぬもので五座るが而も其之を罵詈する者の三度も重るに於ての如何に勘忍強き佛とても黙すること能はざ途に勘忍囊の緒も切れて勃然として忿怒らるゝと云ふの様と云ひにしもので五座るが余の亦全く右に一轉したるものあるを信じます開は如何なるものであると云ふに取りも直さま閻魔の顔も三度と云へるもので五座る凡う其始め之を見て戦慄るゝが如き最も恐怖しものとは申せ之を見ること再三再四に及びますれば之を恐怖るゝの念慮も從て減少になり最初に閻魔の顔を見し時と三度目に見し時と見

童の心中にも驚怖の度を減少すに相違なきこととて五座りませう他の人事も亦是れと同様のことにて残忍の舉動或は刻薄の悪行を記載したる小説あどを讀むこと多き時の其心自然と知らず識らず冥々の裡に之れに馴るゝの傾きあるに相違なし若し此の如き小説が唯だ一卷たりともあらんに其二三枚を讀むにも至らずして直ちに器を掩ふて顔をそむける程のものなるべきも此の如き小説が其種類多くして廣く世上に行はるゝことじもあらば一般の讀者の何にとて其残忍の舉動刻薄の行狀に馴染ることのなかりませうや其之れに狎れ之を怪まざるに至ること亦明かなる所で五座りませう既に之を怪まざるに至らば遂には自ら之を行ふを憚らざるの心を生せずとも言ひ難きことで五座りませう是れ豈と閻魔の顔も三度に至れば其の恐怖を減少すに近き道理では五座らぬか之れを思ひ之れをおもへば度かさなるものなまことに恐怖るべきものであるてナ嗚呼(謹聴々々)

○洒落哲學の原理

洒落哲學は原理と申すは少しく大業に似たれども聊か洒落の因て基く所を演ませうと思ひます元來洒落と申すもの如何ある所より出づるもので五座りませうか即ち一個の言葉にして彼方にも此方にも色々の物に意が取れるものより出づるもので五座る畢竟する所言語の不完全にして同じ音にして其意を異にする言や或は似たる音にして其意の異なる語があれば五座る若し夫れ事々物々諸々の言語の音が天と淵月と露の如く差別ありて互に似つきも寄らぬ程のものでありたらんには争てか容易く洒落を出すことを得ませうや夫れてこそ一休和尚も曾呂利新左衛門も土足で逃走さねばならぬことで五座りませう今試みに洒落と申すものは言語の不完全にして一個の言葉にして數種類の意味を持ちたるものであると云ふの例を一二示しませうに數年前のことなり余二三の朋友と初夜銀座の街道を散步しましたるに折節發氣豆屋の傍側にあるに會しました而る

に一個の男兒停立みて其發氣豆を喰ひ居るを見ましたるにや余の此處を一番洒落て友人の笑贊を得んものをと聽てぞ彼の男を指さし先ア諸君見給へ彼の男が豌豆を嚼音武者と食して居るのとやらかしたるに皆々是れいやられたりくと大に笑贊するうちに一人の友人傍らより添へて云へるには彼れ能く見給へ彼れ既に満腹食したる上餘分に十食したりとありければ皆々又大に笑贊しけることが五座りでしたが前の豌豆の其音即ち遠藤に通ひ嚼音々々は武者に同じく又後の餘分十の稍々盛東トウの字判然せず何に致せトウの音たるや亦疑ひなしに似たるものあり是れ即ち言語の不完全にして同一の音若くは類似の音あるに由りて斯くの洒落ることを得るの場合には立至りし所以で五座りませう去れば洒落を出すこと多き言語は其不完全なる證據にして言語の進歩完全に赴くに連れて事々物々の言語夫々別々の音を有するものとなり即ち一言のものに必ず一筆に限れるものとなり行かば漸々洒落を出すこと難きを覺ゆるに至るも

ので五座りませう右の如き譯あれば言語不完全なる上洒落易きものにして我邦の言語の如き随分不完全なるものなれば洒落の方より云ふ時は實に洒落易く余をもて之を見れば今日世人の云ふ所之を洒落んと欲せば一として洒落ならざるいなしと云ふ姿で五座る然れども他の一方より見れば洒落易き丈け其れ丈け言語に一言數意のものあるものにして随分間違魔假の種と爲る恐れなきにあらねば是れ敢て喜ぶべきことでは五座らぬ是れに由て之れを見ますれば洒落の容易と言語の完全との正に反對の比例をなすもので五座る諸君はもて如何と考へなします所(ヒヤ)と云ふ)

○天下最第一の勉強家

諸君よ諸君は天下最第一の勉強家は果して何者であると考へまするか余の觀察する所をもてまますれば彼の吾人良民の公敵たる盜賊が其天下最第一の勉強家であらうと考へます此事は遽に聞きましたならば餘程奇怪

のことに思はれませうが能く／＼考へて見ますれば決して奇怪ことは
 五座らぬ开は亦何故やとあるに諸君試みに思へよ彼等盜賊は如何なる資
 本を卸して如何なる働きを爲すもので五座りませうか即ち生命と云ふ後
 とも先とも唯だの二ツにて二ツと懸替の品なき最も大切のものを資本に
 入る／＼の彼の商人の百や千の資本若しくは職人の五七年の年期奉公の資
 本に比較て見ますれば數十百等上りてある緊要の資本で五座りませう然
 るに之を何の苦慮するの色もなく無雜作にも資本に入れらる／＼は豈と亦
 偉大の決心では五座りませぬか(ヒヤ／＼)既に此最も大切なる生命と云ふ
 資本を入れ其營業とはナト如何はしけれども先づ／＼もて營業と云ふに
 しも近き働かをするの最も賑々しき白晝にはあらで人の最も嫌忌はらる
 し深夜を冒し寂々寥々人なき處人なき處と好み好んで行き人の寝べき時
 に寝もやらす固より人目を忍ぶ稼のことにしもあれば馬車にも人力にも
 乗ることもならず己が膝栗毛をもて歩行の鞆々競々として人の家に忍入

らんとする其苦心と勉強の程は實に驚入りたることで五座りませ(ヒヤ／＼)
 大ヒヤ)是れ豈に天下最大一の勉強家と申すものでは五座らぬか(然り／＼)
 余は之を思ひ之を想ふに付けて感慨の禁する能はざるものが五座りませ
 开は別事にても五座らぬが彼等盜賊ですら勉強すること此の如く其れ驚
 入る程の熱心ありとすれば況して我々正業者たる者は其商たると工たる
 を問はず又其學者たると官吏たるとを論せど又其書生たると小僧丁兒た
 るに關せず皆々宜しく精力を出して熱心に勉強せねばならぬことで五座
 りませ其業務とする所こそ彼我邪正の別われ其勉強の熱心の彼れ既に此
 の如く驚入るべきものなれば若し我々正業者にして怠慢ことしもあらば
 彼等に對して多少の耻づかしき所なき能ひ故に我々正業者には宜しく
 奮って勉強し彼等邪業者を出すべき貧苦と云へる魔物を打拂いねばなら
 ぬことと考へます諸君果して悟合點が参りましたるや否なや(合點したり
 合點したり實に謹聽極る)

○白馬は馬にあらず

世に所謂白馬と唱へるものは是れ馬にあらぬものと云ふて可なるものでありませう乎曰く斯く云ふて可なるもので五坐る开は亦何故で五坐りませうや別でも五坐らぬが馬と申すものは固と形に命くる所以のもので五坐りませう然るに白と云ふものゝ色に命けたるもので五坐りませう夫れ色に命くるものは形に命くるものでは五坐らぬ又形に命くるものは色に命くるものでは五坐らぬ去れば世俗の白馬など唱へるものは固より馬でなきこと判然たる道理で五坐りませう斯く申さば人或い云ふことで五坐りませう子は白馬なしと申さるゝが論よと證據現に世に白馬が有るでい五坐らぬが豈に之を馬無しと謂ふことを得ませうや實に斯くは申されぬことで五坐ると斯様に申さるゝことで五坐りませうが其馬無しと謂ふべからずと云ふものは是れ馬では五坐らぬ即ち白と馬と二種類のものが混淆したる一個の化物と申すべきもので五坐る或人が論より證據現に世に白

馬有りと申すとも固より白の馬にあらぬこと判然たることで五坐りませう开の亦何ぞや今夫れ馬を求むるに廣なるもの或は黒さもの等皆な致さるゝことで五坐りませう然るに白馬と云ふものが有りとして之を求むれば廣さる馬や或は黒さ馬は最早之を求むることが出来ぬ道理で五坐りませう开の亦何故ぞとありませうれば馬と云ふもの既に白馬と申すものに奪ひれて専有されてあれば其餘は唯だ其廣なるもの若くは黒さもの等其色のみ残りて馬と云ふ實體の無ければ復た再び廣なる馬若くは黒さ馬を致すことの出來ぬ譯合で五坐りませう若し白馬をして眞れ馬ならしめば是れ其求むる所一で五坐りませう求むる所一なれば殆んど白と云ふものが馬に異ならず天下豈に此理ありませうや否な決して之れなきもので五坐る是れに由て之を觀れば白馬の馬にあらざること亦審かなることでは五坐らぬか(ヒヤ)く(大ヒヤ)

○放屁の重量を量るの方法

諸君よ諸君は今余が此の如き奇々怪々なる題號を掲出し來れば定めて果
 然て亦言句なきことで五坐りませうが余は決して偽ならず必ず眞に能く
 放屁の重量を秤るの方法を演べませうと考へます就きまして英國の理
 學の大家に撒亞阿爾多爾羅勒と云へる者が五坐りしましたが此人嘗て煙の
 重量を秤り知ることを得ました余は今羅勒の煙の重量を秤り知りたる方
 法に基き聊か他に亦發明する所ありもて全く放屁の重量を秤るの方法を
 演べんことを期するものにて五座る昔し此羅勒なる者一日時の女王以利
 沙伯に見へて云へるに臣能く煙の重量を秤り知るの方法が五座るが今
 夫れ之を驗して差はざることを得ましたならば王須らく賭物を賜ひり候
 へどありけるに王曰く諾と肯ひけるに是に於て羅勒は煙草を秤り之を
 喫し了りて煙盆に残留りし死灰を秤り之を煙草の重量より減じ其差をも
 て煙の重量と爲し具よ精算の法を陳べければ王深く賞歎して若干の賭物
 を賜ひりとか聞き及びましたが今夫れ余は煙草の煙より數百千等六ヶ數

放屁の重量を秤るの方法を演べて能く論事矩に適へ斯くては必ず放屁の
 重量の違ふことなく知ることを得べしと信じましたるならば諸君の其れ
 或の若干の賭物を余に賜はりませうや否や随分其新奇中の新奇の發明で
 も五座れば諸君輕々に聽過することなく能くお聞き取りあらましく且つ
 之を聽いて感じたるならば若干の賜のありても然るべうもや存せられま
 す能く能く之を秤ることの方法を陳せば何なりと望みの賭物を與へん然
 らば其方法を演べませうが今夫れ茲に放屁の重量を秤らんと欲する者の
 全身を先づ何程と秤り置き而して後ち一發の屁を放たしめ復た再び其身
 體を秤り其差有らば則ち其差が放屁の重量にして若し其差無ければ放屁
 には重量と云ふもの之れなきものと知らるべし然かし余れ考ふる所を
 もてすれば放屁とても亦一個の物に相違おければ多少其重量のないと云
 ふの道理はなし必ず幾分かの重量があること亦疑ふべくもあらざる所
 で五座る故に諸君にして若し疑ふ者が五坐りしましたならば試みに薩摩芋

の二三錢も求め来て一時に之を食し快く一發の屁を放ち其前後の身體を
釋り見られよ必ず幾分の差を生ぜべし然らば其差こそ是れ其放屁の重量
と知られ上諸君果して多少の感動を惹起せられたるや否や若し夫れ多
少の感動を惹起せられたることあらば既に約束の賭物の如何に之を賜ふ
の氣ばなさや否や(聴衆皆な顔を外し臍の宿を替へ殆んど顛倒りてヒヤ
〜絶笑大ヒヤ〜と絶は〜)にも笑苦みつゝも拍手喝采せり)

滑稽自慢演説

附録討論會

○懶惰者は果して何物に譬ふべき乎

一番議員發議者怪面野金八の議長を呼んで曰く諸君よ余の今日懶惰者は
果して何物に譬ふべきかと云ふの題案を提出するものなるが抑も此懶惰
者と申す者の常に余の勉強耐忍と云へるものに反對するもので五坐れば
是れ我々勉強社會の公敵で五坐る故よ余は何か此懶惰者に適當したる最
も賤劣の尤も野卑の物に譬へて彼等懶惰者をして唯だ此譬喩の物を見聞
したるのみにして早くも既に慚愧殊に太甚だしく常に五尺に出入する體
軀も殆んど寸小に縮するの思ひあらしめ自ら穴でも穿ちて隠れもなさ
ん心地を生じ幾分か改悟する所ありもて少しは勉強するの人と爲らしむ
るか去らすも譬喩の物を見聞して最慚愧の心を生ずるより勢ひ其後此懶
惰者の社會へ入會する者の少なからんことを期するものなり去れば是れ
一種の勸善懲惡の道で五坐る然らば此懶惰者は果して何物にか譬へんか

余の糞野郎と申したならば宜しからうと思ひます井は亦何故やとあるに諸君も亦既に五存じの如く糞は天下最第一の汚穢のもので五坐る故に路傍などに一塊の糞なせに遭遇すれば人皆な鼻を撮むか去らざる面を外向て早々にも通過ること五坐りませう彼の品を賣る婦女子も容易く「オヨコ」急ぎ足には歩かぬものなれども此糞の路傍にあるや敢て他より疾く行かんことを望まぬとも彼れ自ら早足にて通過るもので五坐る眼を轉じて世人が彼の懶惰者に對するの感情如何を顧みるに苟も少しく心ある者は孰れも皆な爪弾きして殆んど鼻を撮まぬ計りに面を外向ること宛然路傍に蟠る糞を見て面を外向るに似たるものなれば懶惰者は宜しく糞野郎と云ふべきものであらうと考へます諸君は如何と爲すや

二番 職員細野熊吉議長と呼はりつゝ曰く「イヤー怪面野氏には近頃奇異なる提案を提出せられたるものある哉發議者の説に據れば我々勉強家の公敵たる彼の懶惰者に適當なる最も賤劣の尤も野卑の物をもて譬喩を取へ

彼等をして慚愧改悟せしめ是れをもて一種の勸善懲惡に爲さんとの趣き最と面白くも亦絶妙の卓論なり是れ予の大に賛成を表する所なり去りながら其之を糞野郎と譬ふべしと云ふに至ては予は怪面野氏の向を張て熱心に反對せざるを得ぞ「何故やなれば糞と云へるもの」天下必要のものとして社會一日も欠くことのならぬものでは五座らぬか若し此糞にして一日なかりしことあらば彼の至緊至要生命の親玉たる米麥を始め五穀其他の野菜物等を培養することはありますまい然るに此の糞なればこそ五穀其他の野菜の肥満みて出来る所以にして又此五穀野菜があれればこそ我々人類も亦肥満みて成長する所以あるべけれ去れば此糞様は我々第一の父母と申しても宜しきもので五座らうと考へます「傍聴衆傍らよりヒヤ」と叫ばれけり是れに由て之を觀れば糞野郎と申すは昏に悪しからざるのみならず却て善きもので五座れば這は發議者の精神にしもあらざるべしと信せられます何となれば彼等懶惰者をして慚愧改悟せしめんと

したるものが却て彼等をして我々ころは彼の最も必要なる糞と同じき位
 置に立つものにて社會になくて叶はぬものなりなど、鼻動めかしつ誇る
 種と爲るの恐れあれば五座る然らば宜しく他の物に譬へざるべからざ
 るものでありませう就て予の考へにては之を屁鋒野郎と申したるなら
 其れ或は彼等の有りても有る役を爲さぬ者に能く適當したる綽號であら
 うと思ひます开は亦何故やなれば彼の放屁は有るか無きか殆んど目にさ
 へかゝらぬものなれば此の懶惰者も亦能く此れに似て居れば五座る此
 譬諭發議者の果して首肯するや否や又列居る諸君は予の既に賛成するや
 否や

三番職員瓦落八五郎議長と呼びて曰く奇怪なる哉討論や吾儕は發議者に
 も反對者にも賛成を表すること能はず而して其發議者の彼の懶惰者を糞
 野郎と譬ひしことの不可なるは既に二番職員の論破する所となりしか
 は吾儕今敢て更らに之を賛せざ唯だ吾儕は二番職員の之を屁鋒野郎と綽

號すべしと申されましたるを駁撃しませうと思ひます二番職員は何にや
 ら放屁を無用のものゝやうに申されましたが是れ大なる謬見と云ふもの
 で五座る夫れ諸君知らずや此放屁と云ふものゝ按ずるに藥劑學中の最も
 緊要なるものにして苟も欠くべからざるもので五座る去れば世の諺にも
 一錠の放屁の能く藥千服に當ると云ふなるで五座らぬか(ヒヤ)故に
 若し夫れ此屁にして出でざるに至れば其人は必ず重病に罹り其顔色さへ
 に幽盤然として最も青き相を呈すること五座りませう然るは斯
 く重病に罹り居るの身にして偶ま此放屁丸を服するに於ては其氣の爽快
 こと殆んど云いん方なく實に千服の他藥を用わたるに彌増すの思ひぞせ
 らるゝことで五座りませう(ヒヤ)大ヒヤ此至緊至要ある放屁をもて彼
 の懶惰者に譬へるは是れ甚だもて分に過ぎたるものにて到底眞の譬諭と
 爲すこと能はざるもので五座る故に如何様に考へても彼の懶惰者の屁
 鋒野郎とは云ふことの出来ぬもので五座れば何んぞ他に適當の譬諭を與

へねばならぬことで五座る然らば何に之を譬へて可ならんかと云ふに吾
 儕の考へにては這奴何にも他に使ひ道もなければ已むを得ず香物の壓に
 するより外に分別もなし去れば這奴の綽號は宜しく香物壓石どころは申
 すべければ是れ果して諸君の賛成を得ませうや否や
 四番議員神田吉五郎議長と呼びかけて曰く異なる哉お馳や三番議員の論
 せらるゝ所に據れば彼の懶惰者をもて香物壓石と申すべしとのことなれ
 ども是れ深く究めざるお説あり何となれば諸君も亦既に知らるゝが如く
 彼れ懶惰者の唇に勉強の精力なきのみならず又併せて耐忍の氣根なきも
 ので五座りませう此耐忍の氣根なき者が何とて香物の壓石と爲りて耐へ
 て居られませうや五分か十分の程の去來知らざ三十分一時間とならば漸
 く厭倦を生じ欠伸々々又欠伸遂にはノコノコとして香物樽の外に歩行さ
 出でし物の役に立つべくもあらず是れ素鏡に懸けて見るが如く其れ明
 白なることで五座る(ヒヤ)去れば此懶惰者の香物の壓石の代用にもあ

り難きことで五座りませう然らば之を何に譬へたならば能く適當致しま
 せう我輩の考へにては之を骨董屋の長鎗と申したらば其れ或は宜しか
 らんかと思ひます何となれば彼の長鎗の骨董屋の厄介物にして甚だ邪魔
 を感ずるものなれども骨董をもて營業を爲し居る身は其營業に對しての
 名利として長鎗は邪魔なればとて獨り之のみ取扱あり難しども参ら
 ず營業の務めとして是非に亦之れをも賣買せねばならぬことなり此の懶
 惰者も亦世の厄介物にて實は娑婆塞げのことにしもあれども生あるもの
 なれば無情に山や海に棄てる譯にも参らず我々人類と生れ出でにし上は
 娑婆の務め浮世の義利やんことなく此懶惰者の世話を爲す譯合なり其情
 態能くも彼の骨董屋の長鎗に似て居ります是れ我輩が懶惰者をもて無用
 の長物たる骨董屋の長鎗と云ふ所以で五座る知らず諸君の如何に考へな
 すや

五番議員氣樂齋彌次郎兵衛議長と呼んで曰く四番のお説の稍々其譬喩の

本點に近づきたるものあるを見まするけれども熱く考へて見れば亦未だ
 しと申さねばならぬことで五座りますす開は亦何故とあるに彼の長鎗は骨
 董屋にある間こそ多少邪魔にもなれ若し夫れ此長鎗が無かりしならば多
 少天下の禍乱を鎮定するの間暇取りともなることで五座りませう此長鎗
 は昔し楠正成が發明して以來戰場の要器にして苟も欠くことのならぬも
 ので五座る去れば鐵砲の發明ありて後ち其流行するに従ひ益々他の兵器
 は廢れたるにも拘はらず長鎗の音に廢らざるのみならず鐵砲の流行と共に
 に愈々流行し彼の最も猛隊の間に高き騎兵は此長鎗をもて其戰鬥の兵器
 とせらるゝことで五座りませう故に一たび此騎兵が長鎗を振って突出る
 時の砲銃手は得て之を支ふることなり難く遂に开が爲めに塵粉に蹂躪ら
 るゝことは屢々にして敢て珍らしからぬことで五座りませう此の如く必
 要なる長鎗に何とて懶惰者を比較ることを得ませうや實に物類を遠ざか
 るも亦太甚しきもれと謂はねばならぬことで五座る然らば何に之を譬へ

て可ならんか吾人の考へにては之を藥殼野郎と申したならば其れ或は善
 からんと思ひます按ずるに古昔秦の始皇帝奢侈を極め彼の阿房宮を建築
 して之れに夥多の美人を養ひ置けるが始皇の身は固より一ツよして宮女
 の數は夥多なれば一年に一たびも始皇の幸ひを蒙らぬ者多く皆々餘りと
 云へば餘りに甲斐なきを苦に病み常に湯藥に身を浸し其藥の毒殼を庭中
 の一隅に棄てたるもの數年の後は一大藥殼山を爲したるにぞ遂に人々之
 れに眼を注ぎ道は是れ如何にしたらば宜しからん固と大金の結果なれば
 無殘に棄て置くも本意なし去らば野菜の肥料にもやあらん或は何にあら
 んか蚊にならんかど種々ど工夫を凝したれども遂に其役に立つの道を得
 ず實に藥殼なるもの哉と歎息しけるが世の物の役に立たぬ者こゝ此に譬
 ふべけれどて其後役に立たずの人を藥殼とは云へる由し聞き及びぬが今
 夫れ懶惰者も亦此に譬へ藥殼野郎と云はゞ能く適當するもれてあらうと
 思ひます諸君果して如何と爲しますか

六番職員五退舎喜太八議長と呼びつゝ曰く五番議員の藥野郎のお説一應の五尤のやうに聞ゆれども再應は不尤のことと信じます何となれば藥の發散は役に立たぬものでは五座れども是れでも以前は大必要のもので人の危篤なる疾病を醫藥したるもので五座る然るに懶惰者の宙に今日物の役に立たぬのみならず以前も亦物の役に立たぬものにて亦此後ちども物の役には立たぬもので五座りませう去れば決して此れをもて彼れに譬ふることは出来ぬ譯で五座る然らば之を何に譬へて可なりませうや余輩の見解をもてすれば千思萬考遂に之れに譬ふるものは五座らぬと察します开は亦何故やなれば宇宙の森羅萬象其數億兆宙ならずとは申せ一として懶惰者に譬ふべき程の役に立たぬものは五座らぬ皆な夫れく何か多少の用がありて存するもので五座る去れば何ども致し方なく懶惰者は取りも直さず懶惰者なり彼れ物の役に立たぬこと即ち物の役に立たぬものなりと云ふより外に亦物の譬ふべきもの到底五座らぬ故に余輩は彼

の梁人の猫に強名を命せんとて遂に廻り回りて矢張猫と命じたるが如く懶惰者をもて即ち懶惰者に譬ふせうと考へます諸君は必ず賛成を表すること五座りませう

議長はやをらほがらかなる美聲を振放ちて曰く最早動議も殆んど盡きたるやうなれば決を取らんに一審發議者の意見に賛成の者は起立あれと命じたるに小數故否決夫れより順次に起立を命じたるに五番まで何れも皆な小數に付き廢案となり最後六番の説に賛成の者の起立あるべしと命じたるに起立過半數あれば遂に六番の説懶惰者をもて懶惰者に譬ふるの議に決したり是に於て議長の此旨を報ずるの聲に應じ(傍聴衆滿堂の破裂するが如く拍手喝采せり)

○馬鹿ふ附くる藥劑有りや否あや

一審發議者名無權兵衛議長と呼んで曰く馬鹿に附くる藥劑は有るものなりや否なや從來世俗の説に據れば馬鹿に附くる藥劑の無しか云ふなる

が果して然るものなりや否や余は今此議題を提出してもて諸君の討論にかけて其眞理を研究せんと欲します就て余の思考をもてすれば如何に馬鹿なればとて之れに附くる藥劑の無しとの斷言し難き者であらうと察します開は亦何故やなれば近世文運の進歩するに従ひ生理學は開け醫道は明らかになり昔日不治の疾病と稱したりしものも今容易く治癒を施すを得るに至りしは普く世人の知了する所なり然らば此馬鹿にも亦附くる藥劑の有りて存することは疑ふべうもなきこととて五座る若し夫れ之れに附くる藥劑の無しとせば世の所謂智者と云へる者も亦實は意氣持のなきものにて其馬鹿に附くるの藥劑を發見して彼等に之を附けてもて彼等の馬鹿を治療する方法の思考の附かぬとは是れ亦一種の愚者にして實は智者といふはれぬもので五座る去れば世の所謂智者にして若し造化に等しき智識を有するものとせば何と馬鹿に附くる藥劑の調合もなきにあらざるべしと信じます唯だ其藥劑の調合法は如何にして可ならんか

余今差當り其思考を持たざりながら其之れに附くる藥劑の有るべきこととは余の堅く信じて疑はざる所にして今此説を主張して本討論を起す所以で五座るが諸君は果して如何に思惟や

二番論者西原木左衛門議長と呼びかけて曰く異なる哉發議者の説や彼の馬鹿に附くる藥劑ありとは近頃珍奇しくも馬鹿々々敷誤偽論なり予は大に反對の意見を懐く者なり何や若し夫れ此馬鹿に附くる藥劑の有りとすれば是れ其實馬鹿と申すものでは五座らぬ何となれば纔の藥劑をもて治療るものなりせば其精神の敢て馬鹿からず多少智力を有する所あれば五座る若し夫れ眞の馬鹿者なりせば何とて之れに附くるの藥劑有りませうや開は如何に尋ぬるとも決して之れなきもので五座る論より證據現に馬鹿者は舛にて量り突にて算する程あるも世之を如何ともすること能はずして昨年の馬鹿は取りも直さず本年の馬鹿にして本年の馬鹿の又明年の馬鹿ならんこと吾人の親しく見聞する所の事實では五座らぬか去

此ハ毛唐人の親分隊長なる孔夫子も亦女子と小人といひ難しとい申されたるでい五座らぬか其所謂小人と申す者が一名馬鹿とは云はるゝ者で五座る故に此馬鹿に附くる藥劑が有るをいは是れ途方途徹もなき謬見で五座る諸君果して如何に考へますや ○三番論者浦野源右衛門議長と呼びつゝ曰く二番論者の尻の穴の小さきことを申す者なる哉吾儕は一番發議者の説に賛成するものなり西原君試みに思へよ方今文明の氣運の格別の高度に達し歐洲の如きは盲人聾者若くは啞子等の厄介ものを夫れく教育の道を發明してもて學問さするにあらずや此等の者にして既に然るを見れば馬鹿とて豈に夫れ教育の道なからさんや必ぞや其教育の道ありて存することあり去れば其教育の道こそ即ち馬鹿に附くる藥劑では五座らぬか吾儕が發議者の説に賛成を表する所以のものであるなれ四番論者新田牛太議長と呼はりて曰く吾輩は二番論者西原君に賛成して發議者の説に反對せんと欲するものあり何や三番論者浦野氏の意見に

據れば盲人聾者若くは啞子にてすら尙ほ且つ教育することを得るをもて見れば馬鹿も亦教育することを得べしとの説なれども是れ深く究めざるの見解なり論者試みに思へ彼の盲人聾者若くは啞子は是れ皆な其疾病とし思ふる所のもの肉體の機官にありて存するものにして敢て精神の知覺を失ひたるにあらねば开を教育することを得れども此の馬鹿と申すも此の肉體こそ完全に具備へたれ其肝心要の精神を失ひたれば得て教育すること能はざ好しや教育することを得るとするも唯だ夫れ馬鹿の範圍の中に於て纔かに大馬鹿を中馬鹿に直し中馬鹿を小馬鹿に爲す位るの所にて此馬鹿てふ範圍を脱して智者の領分に入らしむること能はず去れば馬鹿は何程鍛錬へるとも矢張依然たる馬鹿にして其馬鹿てふ地金の到底鍛錬ひ直すことい出来ぬもので五座る然るを尙ほ且つ剛腹にも馬鹿に附くる藥劑有りともあらば彼の教育と云ふが如き漠然たる答へを止めて眞に確乎明瞭なる答へ即ち馬鹿に附くる藥劑の調合法を舉示せよ否らぞん

ば發議者の説に到底成立つものにあらざるなり
 五番論者馬飼鹿之助議長と呼びて曰く反對論者新田君のお求めに應じ我
 儕は其馬鹿に附くる藥劑を示名しませうと考へます固より藥劑とても一
 服飲みたから直ちに其疾病が全治すると云ふにしもあらず二服三服或は
 五服十服と益々飲むに從ひ漸々と快方に赴くものなれば若し一服にして
 直ちに其現が見へぬとて忽ち醫者取替へするが如き短氣のお人ならば未
 だもて共に人身の治道を論議するに足らざるもので五座る故に若し夫れ
 斯く短慮の者にあらずんば乞ふ我儕が是れより將に示めさんとする所の
 馬鹿治療の藥劑を聞かれよ抑も智者の道理をもて説くことを得べしと雖
 ども馬鹿は耳はあれど殆んど木耳同様にして道理の談話は到底耳朶に入
 るべくもあらず實に馬耳に東風のうよぐか或は念佛にても聞くの心地に
 て敢て其道理の解るべき所以もなく遂に厭倦を生じ欠伸々々又欠伸に
 て再び脱かんやうもなし去れば斯くては汝の得とあるや否な斯かれは到

底汝の損たるを免れずと一聲唱ふれば彼れ今まで馬耳に念佛なる道理の
 談話にて既に寢氣を催しつゝもボク／＼何やら低頭を始めたる首もムク
 くと勃興り耳根を持揚げて能くも聴かまく欲するの彼等の常態ならむ
 や(ヒヤ／＼)如何に馬鹿にても損得の談話にては茲ぞ聞かさんばあるべか
 らずとの心を發起するものと見へ忽ちにして耳穴を振立つるの實に現な
 るもので五座る斯くも人間の慾張りたるものある哉之を思へば亦悚然そ
 るものなり噫亦淺劣の世の中やな开は兎まれ角もあれ損徳經濟丸が即ち
 彼の馬鹿に附くる藥劑で五座る既に損徳の談話にて彼れ馬鹿者の耳を引
 立てたるこそ是れ其效ふべき端緒に就きにしものと謂ふべけれ去れば是
 れより漸々説き進むれば遂にの教へ導きて其馬鹿の地金を鍛錬ひ直すこ
 とをも得ませう是れ豈に馬鹿に附くる藥劑の有るにて候はずや
 議長四方を見渡して曰く最早動議も盡きたるやうなれば決を取らんに發
 議者馬鹿に附くる藥劑有りとするの説に賛成の者は起立われよと命じた

るに過半数あれば此説に決す議長又曰く然らば其馬鹿に附くる藥劑は五番の説たる損徳丸と申すもので五座らうや否や五番の説に賛成の者は起立あれよと命じたるに是れ亦過半数なれば其馬鹿に附くるの藥劑は損徳丸なりと決す(聽衆囂然拍手喝采せり)

○人は魚は樂みを知るや否や

一番發議者莊子議長と呼びて曰く我れ嘗て惠子と濠梁の上に遊びましたるに時に鯈魚出で、遊びけるが其狀從容として最も嬉さうなりければ我れ惠子を顧み指もて彼の鯈魚を指示し惠子君夫れ見給へ豈と嬉さうには游泳居るでないが是れ即ち魚の樂みと申すものなり如何に生を異にするに雖も彼等の樂みを見つゝある我等に於ても亦甚だ樂みを感じるところでは五座らぬか

二番論者惠子議長と呼んで曰く奇異なる哉發議者のお説や余之を何之子に聞く人の心は我れにあらま安んず人をもて之を我れに渡るを得ん我れ

の心の人にあらず安んず我をもて之を人に渡るを得んと同じく人と人に於けるも既に此の如く相度ることを得ざれば況してや人をもて魚を度ることを得んや子の魚にあらず安んず魚の樂みを知るや這の亦近頃奇怪のお説と謂ふべし

莊子勃然として反駁して曰く惠子君よ能く思へ子は我れにあらず安んず我れの魚の樂みを知るざるを知らんや妄に人を議すること勿れ是れ徒らに異議を好むものところ謂ふべけれ

惠子やをら頭を擡げて曰く成程莊子君の云へるが如く我れ子にあらねば固より子を知らざ然らば子も亦固より魚にあらざれば子の魚の樂みを知らざるや全し何とて爭論し給ふや這は亦餘りに剛復の至りなる哉

莊子復た頭を振りて曰く否なく然らず請ふ其本に循へ子曰く汝安んず魚の樂みを知らんと云ふもの既に已に吾れの之を知るを知て我れに問ふ我れ之を濠上に知るなり嗚呼何んぞ其本に歸へらざるや

三番論者天眞子議長と呼びかけて曰く我れは恵子君に賛成を表する者なり故に聊か恵子君に代りて答へまく欲するなり莊子君聽き給へよ莊子は恵子にあらす安んず恵子が莊子の魚の樂さを知らすと云ふことを知らんや此れより以往何程討論するも循環々々て際崖なきこと乎かし然らば莊子君に恵子君を鎗込めたりと鼻動めかすこと能はず否な管に鼻動めかすこと能はざるのみならず却て莊子君の説こそ不可あるものにして恵子君の説より可あるものなれ

四番論者哲想子議長と呼びて曰く嗚呼恵子君を始め天眞子君等反對論者は皆其れ唯だ徒らに異説を好むものにして眞に能く道理を論ずるものにあらず何ぞや凡そ從容として遊びつゝあるものは吾人々類に於て常に其樂みなるものとして誰か亦否らずと云ふ者あらんや人類と魚と其生は異なれども同じく天地の間に棲息どころの動物にしもあれば其樂みを樂みとし其悲みを悲みとすることの大略同一の情合のものにして敢て大差は

なきものなるべし去れば此の人類の情をもて彼の魚の從容として遊びつゝあるもの、其樂みたることを推測るも豈に亦大早計なることか之れあらんや實に至當の觀察なり故に吾儕は莊子君の説を賛成し心ある人は必ず魚の樂みを知るものと爲すなり反對論者もて如何と爲す乎
五番論者隱君子議長と呼びて曰く諸君子には奇怪の討論を始めたるものなる哉余輩の固と發議者の説を賛成するものにあらず去りて又敢て反對論者の説に同意するものにあらず聊か裁判官の位置に立ち兩者の間に入りて勸解を試みんと欲するものなり莊子君始めより四番論者哲想子の如く心理學上の道理をもて論せなば其意見或は莊子の是なるに近し然るを之れに反對するは是れ徒らに異説を好むものに似たり然れども彼れが如く子の我れにあらず子の魚にあらずなど専ら論事矩上の討論に於ては恵子君の意見其れ或は是なるに似たり何ぞや莊子君恵子君に對し子は我れにあらず安んず我れの魚の樂さを知らざるを知らんやと云へるをも

て推測れば莊子君は其同一舌をもて引續きて直ちに左の如く云はざるべ
 かゞざるの論勢なり何予や曰く我れも亦魚あむらざれば魚の樂さを知ら
 せと斯様に云はねばならぬことなり好しや口舌の之を云ひぬども其論理
 の業に已に斯く云へるものたるや亦明かなり之を要するに莊子君にして
 惠子君に對し子は我れにあらず安んず我れの魚の樂さを知らざるを知ら
 んやと云ふに意見を持ざるものなれば去來知らせ一旦既に此意見を持ち
 口舌にさへ發するからは無論己れも亦魚にあらずれば魚の樂さを知らせ
 と云ふに歸着とべし故に余輩は當初莊子君の說をして四番論者の所說の
 如く更めてもて此說に従はんと欲するなり
 議長發議者の說より順次に開が賛成の諸論士に起立を命じけるに何れも
 小數故成立せず最後に五番論者の說に同意の者は起立あられよと命じた
 るに多數に付き遂に此說に決す

版權登錄

附錄討論會終

明治二十二年三月十五日印刷

明治二十二年三月八日出版

定價金拾錢

著者兼
發行者

東京府平民
西村富次郎

版權
所有

印刷者
山崎又三郎

東京京橋區八官町廿四番地

發兌元
自由閣

東京京橋區大鋸町四番地

東 京 大 賣 捌 書 肆

日本橋區橫山町三丁目

辻岡屋文助

全區馬喰町二丁目

山口屋藤兵衛

全區本石町二丁目

上田屋榮三郎

全區道四丁目

春陽堂

全區全町

金櫻堂

全區全町

明進堂

全區松島町

鶴聲社

全區小網町二丁目

永昌堂

淺草區三好町

大川屋錠吉

京橋區南鍋町一丁目

兎屋誠

